

2005年度事業の概要

1 調査と研究	26	研究集会	40
飛鳥藤原京の発掘調査.....	26	文部科学省科学研究費補助金.....	41
平城京の発掘調査.....	26	学会・研究会等の活動.....	45
文化遺産研究部の研究活動.....	27	文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への 指導・助言・協力等.....	45
●建造物研究室の調査と研究.....	27	●平城宮跡の整備.....	45
●歴史研究室の調査と研究.....	28	●特別史跡高松塚古墳の調査.....	46
●遺跡研究室の調査と研究.....	28	●キトラ古墳の調査.....	47
埋蔵文化財センターの研究活動.....	29	発掘調査現地説明会.....	47
●遺物調査技術研究室.....	29		
●遺跡調査技術研究室の調査と研究.....	30	2 研修・指導と教育	48
●古環境研究室の調査と研究.....	30	埋蔵文化財センターの研修と指導.....	48
●保存修復科学研究室の調査と研究.....	31	京都大学大学院の教育.....	48
●保存修復工学研究室の調査と研究.....	31	奈良女子大学大学院の教育.....	48
●文化財情報研究室の調査と研究.....	31		
●国際遺跡研究室の調査と研究.....	32	3 展示と公開	50
国際学術交流.....	32	飛鳥資料館の展示.....	50
●中国社会科学院考古研究所との共同研究.....	32	平城宮跡資料館の展示.....	50
●遼寧省文物考古研究所との共同研究.....	33	解説ボランティア事業.....	51
●河南省文物考古研究所との共同研究.....	33	図書資料・データベースの公開.....	51
●韓国国立文化財研究所との共同研究.....	33		
●西アジア文化遺産保存修復のための 緊急協力事業.....	34	4 その他	52
●異なる環境条件下における不動産文化財の 発掘技術及び保存に関する調査研究.....	34	刊行物.....	52
海外からの主要訪問者一覧.....	35	人事異動.....	56
海外からの招聘者一覧.....	35	予算等.....	57
海外渡航一覧.....	36		
公開講演会.....	39		
第96回公開講演会.....	39		
第97回公開講演会.....	39		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、2005年度に計9件・4874㎡の発掘・立会調査を実施した。うち、藤原宮の調査が4件・2898㎡、飛鳥地域等の調査が5件・1976㎡である。以下、主な調査について概要を述べる。

藤原宮の第136次調査では、朝堂院東第六堂の調査をおこなった。調査は秋・春・夏の3班があたり、藤原宮跡の朝堂としては、一度に建物全体を検出したのは初めてである。建物規模は桁行き14間（168尺、49.3m）、梁行4間（38尺、11.2m）で、桁行寸法は14尺等間、身舎の梁行寸法は10尺等間、南北両庇各9尺である。礎石位置には礎石据付堀形が掘られ、据付堀形内に入れられた根石は極めて良好な残存状況を示し、地盤の悪い東側では特に入念に石が入れられていた。基壇外装については、北縁部の東側で、計10～20cmの石が東西方向に並ぶ場所があるが、外面をそろえておらず、土留めなどの石列であり、朝堂が木製基壇であることも一応は考えられるが、確証はない。第六堂の建設に先立って、基壇予定地の周辺をめぐるように四周に溝を掘削し、完成とともに埋めたてていた。また、藤原宮廃絶後、調査区の東側を中心に9世紀頃とみられる土器と共に、掘立柱建物や塀を検出しており、平安時代初期の屋敷地が営まれていたことを示している。

藤原宮の第138-2次調査は、内裏中心部の東方を発掘した。東西総延長118mにおよぶトレンチで、既調査で検出した建物や塀、基幹水路などの延長部を確認した。また、内裏東方を東西幅約50mに区画する南北塀と、それにL字形に接続する東西塀を検出した。その南北塀の西側、すなわち内裏中心方向には、人頭大と親指大の石敷が南北に分けて敷かれていた。

藤原宮の第138-3次調査は水路改修にともなう南北に細長いトレンチ調査であるが、朝堂院の東側にあり、朝堂院の東方官衙区域内にあると考えられる。掘立柱建物2棟、塀、石組東西溝、素堀溝などを検出し、主要な官衙施設の存在を示している。

飛鳥地域の調査としては雷丘（第139次）、石神遺跡（第140次）、甘檜丘東麓遺跡（第141次）の調査がある。

雷丘の調査では、独立丘陵名として名高い雷丘の全容がほぼ判明する確認調査区を設定し、中世の山城の

薬研堀を検出した。これから、現在の雷丘は中世の山城が築かれた時に、大規模に削られていることが判明した。また、古墳本体は検出できなかったが、5世紀後半から6世紀前半の埴輪が出土し、この時期の古墳が数基、雷丘の上に存在した可能性を示している。さらに、7世紀代と考えられる小型石室を検出した。

石神遺跡の調査では遺跡北側の土地利用の一端を解明し、天武朝の祭祀遺物を出土する溝を検出したが、阿部山田道は検出していない。

甘檜丘東麓遺跡の調査では、7世紀の掘立柱建物6棟と塀3列を確認し、谷の広い範囲で大規模な整地がおこなわれていることを明らかにした。今回の調査区は1994年の発掘区に近い位置にあり、1994年の調査では焼土層と焼土層出土の土器の年代から「日本書紀」に記載のある蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関連を推定していたものである。今回の調査は蘇我氏との関係から注目されたが、引き続き調査をおこなって確実な部分を積み重ねる必要がある。

発掘調査にともない実施した現地説明会は、47頁の通りである。

平城京の発掘調査

平城宮跡発掘調査部が2005年度に実施した発掘調査は、平城宮跡5件、平城京跡7件の計12件である。以下、主要な調査成果について概要を述べる。

平城宮中央区朝堂院地区の発掘調査（第389次）は、第367次（2003年度）・376次（2004年度）調査の成果を受けてのものである。両次調査で発見された称徳大嘗宮の全容解明等を目的とする。第367次調査と第77次調査（1972年）の調査区の間、それぞれ一部重複させながら調査区を設定した。

調査の結果、第1次大極殿院南門基壇および南面階段、朝庭部の舗装、平城上皇時代とみられる道路関連遺構などを検出した。第1次大極殿院南門南階段には、2次期の変遷があることを確認した。階段の出が大きくされている。北階段でも3時期の変遷が確認されており、基壇規模の変遷の可能性も含め、慎重に検討する必要性が生じた。また、平城上皇時代の道路遺構では、交差点とみられる部分で側溝に丸太材を用いた工作物が発見された。側溝に蓋をしていたとみられる。なお、

第367次調査以北に大嘗宮関連の建物群は広がらないことも確認した。

平城宮朝集殿院地区の発掘調査（第394・399次）は、2001年度の第326次調査に始まる同地区の一連の調査としてなされたものである。

東朝堂院では、礎石建ち建物以前に、掘立柱建物が存在する。朝集殿院でも、区画施設には2次期あることが判明した。そこで、朝集殿の前身建物の有無が重要な課題となった。第370次調査（2004年度）は、東朝集殿基壇の南1/3を調査したが、下層建物は確認できなかった。

これらをふまえ、第394次では第48次調査（1968年）とほぼ重なる、東朝集殿基壇全体の再発掘をおこなった。また、発掘に先立ってレーダー探査も実施した。

調査の結果、東朝集殿基壇の下に、下層建物は確認できなかった。そこで、基壇直下以外の場所に存在する可能性を検討するため、第399次調査では基壇の北側に調査区を設定した。ここでも下層建物は確認できず、奈良時代前半の平城宮では、朝集殿院相当の区画は存在するが、朝集殿の建物は存在していなかったか、最初から礎石建ちであった可能性が高まった。

旧大乘院庭園の発掘調査（第390次）は、現在庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱をうけ、復原整備のための資料を得る目的で1995年から毎年おこなってきた一連の調査に属する。西小池の全容と西側の陸地部分の状況の解明を目的として、西小池の未調査地およびその西側に調査区を設定した。

西小池・西小池護岸・西小池排水施設のほか、陸地部分で各時期の建物をはじめとして、礫敷遺構や井戸などの施設群を検出した。

西小池排水施設には、数期の改修・変遷がみられる。また、西小池自身の護岸改修も明らかになった。

陸地部分の施設群は各時期の以降が複雑に重複する。室町時代に積極的に建物が整備された状況が判明した。また、『大乘院四季真景図』にある「湛雪亭」とみられる建物を確認し、それと関連するとみられる水溜遺構も確認した。

池自身の管理状況や変遷を確認できたとともに、陸地部分の諸施設の状況やその変遷・拡充が明らかになったこと、とりわけ、おそらくは善阿弥の手による改作の様相がうかがい知れるようになったことは、大きな成果といえよう。

以上、主要な調査の詳細や、平行しておこなった小規模調査の内容については『奈良文化財研究所紀要2006』を参照されたい。

発掘調査にともない実施した現地説明会は、47頁の通りである。

文化遺産研究部の研究活動

当研究部を構成する建造物研究室、歴史研究室、遺跡研究室では、各研究室の個別分野、テーマによる調査研究を継続的におこなうとともに、共同で南都寺院の歴史的景観に関する研究として唐招提寺を対象に取り組んでいる。

●建造物研究室の調査と研究

歴史的建造物・伝統的建造物群の調査研究

建造物研究室では現存建築、古材、発掘遺構・遺物などの現物資料を中心に据えて歴史的建造物及び伝統的建造物群の調査研究を進めている。

2005年度は歴史的建造物の受託研究として、長野県塩尻市から重文小野家住宅及び上間屋手塚家住宅、高知県佐川町から竹村家住宅、（財）竜王会館（岡山県倉敷市）から野崎家旧宅、以上の3件の調査を受託した。旧塩尻宿の旅籠屋である小野家住宅、旧奈良井宿に位置する手塚家住宅については、建造物の歴史的価値を明らかにするための詳細調査はもちろん、周囲の文化遺産との連関を重視し、管理活用計画立案のための調査にも重点を置いた。酒造経営によって発展し、代々御目見町人に名を連ねた竹村家住宅に関しては、主屋の建築意匠の特質や有力商家の遺構群としての価値が高いことなどを明らかにした。江戸末期に塩田経営と耕作地経営で富をなした野崎家旧宅に関しては、主屋や土蔵などの建造物群が立ち並ぶ現在の広大な屋敷敷地が、明治時代までの構えをよく保っていること、建物が同時代の最高級の邸宅建築の様相をよく示していることなどを明らかにした。以上の成果をとりまとめた報告書をそれぞれ刊行した。

また、2004年度からの継続でおこなっている鳥取県近代和風建築総合調査（県からの依頼）を2005年度に完了させた。この成果をとりまとめた報告書は2006年度刊行予定である。

木造建造物の保存修復に関する調査研究

多様化する文化財建造物の保存修復に対処する新たな体制と組織を検討すること、過去の事例を検証しながら今後の保存修復のあるべき考え方・方法を探ること、保存事業に伴い蓄積された学術資料を再評価してその保存活用方法を探ることなどを目的としたこのプロジェクトは、1998年から7カ年計画で進めきた。この成果を提案書として刊行した。

また、この調査研究の一環として着手した乾板写真目録、現状変更説明（本文編・図版編各1冊）の刊行については、本年度に計3冊刊行したが、この刊行は次年度以降も継続する予定である。

平城宮建物の復元的研究

大極殿正殿復原のための大棟中央飾りに関する金具研究会と身舎内部小壁彩色に関する研究会をそれぞれ1回開催し、復原の可能性についての検討をおこなった。また、大極殿院楼閣建築における平面計画と軒架構の方法の検討を昨年度に引き続きおこなった。

その他

文化庁によるアジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業への協力要請を受けて2003年度から着手したベトナム・ドンラム村の集落保存対策調査のとりまとめをおこなうと同時に、現地で集落保存の方策を探るための協議をおこなった。

その他、全国各地で実施されている文化財建造物等の修理事業・遺跡整備事業に関わる修理・復原・整備等に対して援助・助言した。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、世界文化遺産に登録されている南都の寺社所蔵の書跡資料について継続的な調査研究をおこなっている。さらに奈文研に寄贈された歴史資料についても調査研究している。

本年度の南都諸寺院の調査は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺所蔵の書跡資料についておこなった。興福寺関係調査は、現在『興福寺典籍文書目録第四巻』に目録を収録する予定の重要文化財指定品につき、ブローニー版で写真撮影をおこない、目録原稿を作成しつつある。また従来把握されていなかった函についても追加分として順次整理を進め、第90函～第95函の函番号を付し、目録データをパソコンに入力した。これら追加分についても、今後目録としてとりまとめる予

定である。その成果の一部は、『奈文研紀要2006』にも、「信円の花押」と題する文章として掲載した。薬師寺は、筆筭である第29函と、第31函～第34函の調書作成をおこなった。写真撮影は第23函を継続しておこなっている。また薬師寺典籍文書データベースは、データベースの確認作業をおこない、第11函から第15函までを新たに公開した。また第1函から第10函までの既公開分についてはデータの訂正をおこない、データベースを更新した。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第4号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を実施した。従来は東大寺未整理聖教文書と称して調査してきた資料だが、昨年度刊行した科研費報告書において、今までの整理をふまえて新修東大寺文書聖教と命名したものである。本年度は第46函・第49函・第51函の目録データをパソコンに入力し、第5函の写真撮影をおこなった。

唐招提寺所蔵資料については、当部の他の研究室と協力して、唐招提寺の歴史的環境に関する調査研究をおこなっているが、その一環として惣倉所在の近代書類の調査を継続して実施している。また、近世・近代の唐招提寺境内図の調査研究をおこなった。それらの成果の一部は、『唐招提寺の歴史と景観に関する調査研究報告書』に掲載した。

以上の南都諸大寺の調査状況は、『南都諸大寺所蔵歴史資料の調査状況報告』としてとりまとめた。

また、平成17年度には菅原大三郎関係資料が研究所に寄贈されたが、そのための事前調査をおこない、また、寄贈後には内容確認の調査をおこなっている。

その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査、京都府教育委員会依頼の神護寺聖教調査、奈良市教育委員会依頼の氷室神社大宮家文書調査などに協力した。

●遺跡研究室の調査と研究

遺跡研究室は2001年4月発足の文化遺産研究部に新設された研究室である。遺跡整備に関する調査研究と、庭園史に関する調査研究が当研究室の二本柱となる。

遺跡整備に関する調査研究として、整備後の遺跡の活用に対する関心が急速に高まっている現状に鑑み、中期計画では全国各地の大規模遺跡の整備・活用・管理に関する情報収集・調査・分析をとりあげた。計画は5カ年で、全国の対象遺跡の現地調査を順次おこな

い、各遺跡ごとに調査結果をとりまとめた。5年目にあたる2005年度は板付遺跡（福岡県福岡市）、首里城跡（沖縄県那覇市）など九州地方の19カ所と伯耆国庁跡附法華寺畑遺跡（鳥取県倉吉市）など中国地方の4カ所、計23カ所の遺跡を調査した。現地調査のとりまとめは（a）整備手法・技術、（b）維持管理、（c）学習資源としての活用、（d）観光資源としての活用、（e）オープンスペースとしての活用、（f）地域の文化的中核施設としての活用、の6つの観点から現状と課題を整理した。整備後の活用、管理が適切になされるためには整備段階から活用、管理についての綿密な計画を立てる必要があること、担当者をはじめとして自治体の熱意、力量によるところが大きいことなどが明らかになった。なお、研究で得られた成果については、必要に応じて各遺跡にフィードバックすることとしており、当研究室がこの分野における情報センターの役割を担うものと考えている。

庭園史に関する調査研究として、中期計画では日本の古代庭園を対象として文献史料、発掘調査資料、遺跡現地における地形・水系調査などに基づく多角的な研究を設定した。個々の庭園の形態、技術などを明らかにすることによって、庭園の源流、成立過程、変遷を解明することを期している。2005年度は、2001年度からおこなってきた古代庭園に関する調査研究をとりまとめる作業をおこない、報告書を作成した。また、発掘調査された古代～近代の庭園遺跡に関する資料収集とデータベース化も中期計画で設定した庭園に関する研究項目である。これまでに321件の発掘庭園の所在地・時代・構成要素などの基本項目を和文・英文でデータベース化し、当研究所のホームページ上で公開している。英文データベースの公開は当研究所での最初の事例である。画像データの追加・充実が今後の課題となっている。

外国の研究機関との研究交流ということでは、米国ハーバード大学のダンバートンオークス研究所との間でここ数年、情報交換、研究交流などをおこなってきたが、2005年には同研究所が作成した『Ancient Roman Villa Gardens』を日本語に翻訳する作業をおこない、『古代ローマのヴィラ・ガーデン』というタイトルで刊行し、日本における庭園考古学の普及と新たな情報提供を図った。

この他、地方公共団体がおこなっている遺跡の整備

事業や庭園の保存修理事業に関する指導、助言も当研究室の重要な役割であり、2005年度は遠江国分寺跡（静岡県磐田市）、旧円融寺庭園（長崎県大村市）をはじめ51カ所の史跡等についておこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは7研究室からなり、それぞれの研究課題に取り組んでいるのは言うまでもなく、全国の埋蔵文化財担当者に対し、埋蔵文化財の調査や保存、遺跡保存に関する研修を年間を通して開催している。また、地方公共団体や関係機関の求めに応じて、各地でおこなわれる発掘調査や保存事業について、専門的・技術的立場から指導と協力をおこなっている。

●遺物調査技術研究室

本研究室は、室長、松井章に加えて派遣職員2名、客員研究員2名、京都大学大学院生7名の大所帯となり、研究室の狭さが深刻になりつつあり、さらに収蔵庫の玄関にまではみ出した、遺物を満載したコンテナの山に頭を痛めている。平成17年3月より、韓国慶尚南道所在の金海会峴里貝塚の発掘に環境考古学的研究の協力を依頼され、同年11月までの間に5度訪韓し、多くの知見を得ることができた。現生動物骨格標本の作製は、狩猟期間中に仕留められたエゾシカ4頭、ニホンジカ2頭、イノシシ2頭の生々しい死体を入手し、冷凍庫に保存中で、現在も順次成骨化をすすめている。平成16年度にコウノトリの里公園より寄贈を受けたコウノトリの死体2羽のうち、1羽の成骨が完成し、鳥類骨格標本に加わった。独法化後の本研究室の第1次中期計画の成果品のうち、眼目であった『埋文ニュース 環境考古学1～7』が、本年度の「魚類骨格図譜」と「人骨図譜」（『埋文ニュース』122）とで完結し、その成果品として、遺跡から出土する可能性のある動物種の主要骨格を図示した、『動物考古学の基礎』を刊行することができた。9月に英国エディンバラで開催された湿地考古学会（WARP：Wetland Archaeology Research Project）で、「近年の日本における湿地考古学の成果」と題して研究発表をおこない、学会賞を獲得した。さらに1月に大阪市歴史博物館で開催された、世界考古学会議中間会議（WAC：

World Archaeology Congress) で、「考古学から見た差別」と題するセッションで、座長を務め発表をおこなった。発表は関西の遺跡から出土した斃牛馬骨をもとに、被差別部落の形成が、従来の文献史学で主流であった近世起源説に対して、中世に遡る例が少なくないことを論証したものである。

●遺跡調査技術研究室の調査と研究

当研究室では、まず第一に、古代官衙遺跡の発掘調査・研究や遺跡の保存活用に資するため、官衙遺跡発掘調査法の研究を実施している。この研究では、古代の官衙及び官衙関連遺跡とともに、各地の古代集落・寺院・豪族居宅遺跡等の発掘調査資料を収集・整理し、科学研究費をも利用しながら、官衙建物遺構の諸属性について検討し、官衙施設の性格や造営技術の特質を明らかにするとともに、官衙施設造営技術等の復元のためにいかなる情報を遺跡から抽出すべきかという発掘方法の向上にむけた研究をおこなっている。

第二に、上記の研究のために収集した官衙関係遺跡の資料について、適宜公開を目指してデータベース化する作業を実施している。このうち、データベース化が完了した東北地方・関東地方の官衙遺跡について、遺跡の性格、所在地、文献目録、主な検出遺構・遺物の概要、建物遺構の詳細データや、遺跡の所在地図や遺跡全体図・建物図面などの画像データを、奈良文化財研究所ホームページで公開し、中部以西についても公開を目指してデータベース化を進めている。

第三に、郡衙周辺寺院の性格についての研究を進めている。その成果の一部は、後述する研究集会の論文報告集の中に収録するとともに、鳥取市上原南遺跡出土の瓦類の製作技法・型式・編年についての研究成果のとりまとめをおこなった。

第四に、古代地方行政領域の成立過程の研究を進めており、ケーススタディの一つとして因幡国における郡領域の成立状況についての検討作業を進めた。

第五に、古代官衙と集落に関する研究集会を開催した。2005年度は、「在地社会と仏教」をテーマとし、いわゆる村落内寺院のあり方や行基による仏教普及のあり方などをとりあげ、仏教の地方在地社会への普及・受容の実態や仏教が在地社会においていかなる役割を果たしていたかなどについて、考古学と文献史学の両サイドから研究報告をおこない、討議した。

第六に、各地の地方公共団体からの依頼により、全国の官衙・寺院遺跡等の発掘調査、遺跡の保存整備活用等について指導助言をおこなっている。

●古環境研究室の調査と研究

考古学関連

本年度は、11府県27遺跡から約140点の出土木材について年代測定を実施。その中で、京都府宇治市の宇治市街遺跡の発掘調査では、古墳時代の溝跡から70点余りの韓式土器とともに初期須恵器や在来の土器が出土し、これらの土器群と供伴して辺材が完存しているヒノキの板材が出土した。この板材の年輪年代は389年と判明、また同一試料から採取した小断片を炭素14ウイグルマッチング法でも年代を調べたところ、同様の結果を得た。この2つの自然科学的年代法による分析結果は、日本における初期須恵器生産開始の年代を明らかにするとともに、日韓の土器編年研究に極めて重要な年代情報を提示できた点で重要な研究成果となった。

古建築関連

本年度は、7府県から国宝・重文の建物15棟についてデジタルカメラや年輪読取器を用いて現地調査を実施。中でも中尊寺金色堂は、内屋根に使われている棟木に天治元年(1124)八月廿日建立銘が墨書されており日本最古のものであるが、今回、昭和の修理に際して取り換えられた2本の巻柱のうちの1本について、最も幅広く辺材の残存していた添木について調査したところ、年輪年代は1116年と確定、このことより棟木銘の年代が正しいことが裏付けられた意義は大きい。また、取りはずされていた折上げ天井支輪板の年輪年代は1114年と判明、これも巻柱と同様に棟木銘の正しいことが実証できた。経蔵の部材調査からは、今でも一部の壁板や床板に当初材(初代清衡公の時代)が使われていることが確定した。また、中尊寺に所蔵されていた13合の唐櫃は三代秀衡の代に製作されたものであることが判明した。

新しい年輪計測技術の開発研究

マイクロフォーカスX線CTによる非破壊年輪年代測定技術の実用化に向けて、技術面の完成度をよりいっそう高めるべく各種実験を重ねた。技術内容や研究成果は、特許公開公報や国際学会を通して広く紹介された。

●保存修復科学研究室の調査と研究

当研究室では、出土遺構及び遺物の公開・活用に資するための保存科学的研究ならびに保存修復に関する開発研究を進めている。本年度に取り組んだ内容を以下に概観する。

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査によって出土した遺物の材質・構造調査を実施し、それらの保存処理をおこなった。

他機関との共同調査・研究では、「寺福童遺跡4出土銅戈保存修理」(小郡市教育委員会)、「潤地頭給遺跡出土準構造船の保存科学的共同研究」(前原市教育委員会)、「伝持田古墳群出土資料の考古科学的研究」(辰馬考古資料館)の3件を実施した。カンボジア王国アンコール遺跡群において、現地のAPSARA機構との共同研究では西トップ寺院の石材の劣化状態および劣化要因の保存科学的な調査を継続しておこなった。

開発研究では、診断調査方法の開発として、衝撃弾性波試験、超音波伝播速度測定法、打音試験、TDR法、アコースティックエミッション法などを取り入れた遺構の劣化原因の特定をおこない、これらの測定データを基にした保存修復処置法を策定することが可能となってきた。また、携帯型マルチレーザーラマン分光分析装置については分析精度と携帯性の向上を図り、標準試料および考古遺物の分析データの収集・蓄積をおこなった。新たな有機質遺物の分析手法として、シンクロトロン顕微赤外分析法の適用を試み、出土絹織物の埋蔵中の劣化について成分変化の詳細を検討できることが明らかとなった。バッチ式の超臨界溶媒乾燥装置を用いた実験をおこない、短時間のうちに変形することなく乾燥できることを確認した。また新規の強化含浸薬剤としてのリグノクレゾールを効率よく材中に吸着させた状態で乾燥できることが明らかとなった。

外部機関からの受託事業として、鳥根県加茂岩倉遺跡出土品事前調査(文化庁)、鳥根県加茂岩倉遺跡出土品保存修理(文化庁)、妻木晩田遺跡土質遺構露出展示技法研究(鳥取県教委)、古代土壘(石垣)遺構の保存整備手法の研究開発(総社市教委)、長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託業務(長野県教委)、クスノキ製削り抜き井戸の真空凍結乾燥法による保存処理研究(三重県教委)、西谷2号墓出土ガラス遺物の科学調査(出雲市教委)を実施した。

この他、有機質遺物および無機質遺物の材質分析お

よび構造調査をおこない、基礎的データの蓄積を継続した。

また、保存科学研究集会は「保存科学における諸問題-キトラ・高松塚古墳壁画の保存科学と修理-」をテーマとして開催した。

●保存修復工学研究室の調査と研究

中期計画の最終年度にあたる2005年度は、2001～2002年度に実施した全国の官衙遺跡整備状況の調査(『埋蔵文化財ニュース 111号 官衙遺跡整備状況』として2003年2月刊行)と、2003～2004年度におこなった遺跡の斜面保護に関する研究(『埋蔵文化財ニュース 119号 遺跡の斜面保護-遺跡の保存工学的研究-』として2005年3月刊行)を、それぞれデータベース化して、当研究所のホームページ上で一般公開した。公開にあたっては、全国の追加事例の収集に努めるとともに、すでに収録した内容についての加筆訂正と写真・図面等の補足をおこなった。

これにより、文化庁文化財部記念物課発行の『史跡等整備のてびき-保存と活用のために-』(2004年3月刊行)とあわせて、広汎な範囲での情報の共有化と、保存修復の具体的指針としての機能を果たすことが期待できる。それらは、今後、上記項目における追加事例の収集とともに、さらに対象を広げた整備事例の収集とデータベース化・公開を図ることで、いっそうの向上をみるだろう。

また、2005年度は、昨年度に引き続き、埋蔵文化財発掘技術者専門研修「遺跡保存整備課程」を担当した。文化庁をはじめ内外の講師による講義と実習を主体にした構成とし、整備事例としては、蛭子山古墳(京都府)、登呂遺跡(静岡県)、山中城跡(同)、払田柵跡(秋田県)をとりあげた。日程的には必ずしも十分なものはいえなかったが、地域や遺跡の特性に応じた保存・整備のありかたを模索し、時代の要請にどのように応えていくかを問い直すきっかけとなることを願うものである。

●文化財情報研究室の調査と研究

文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況について情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理

情報システム学会大会において「応用スキーマによりモデル化された遺構情報の考古学的分析における自動化」と題して、遺跡情報の分析に関する研究成果を発表した。また、11月には遺跡GIS研究会を開催し、都城のような都市遺跡や歴史都市に関する最新の分析手法についての研究報告や意見交換をおこなった。

文化財情報の電子化として、木簡、図書、全文、写真、遺跡、航空写真、軒瓦、発掘調査報告書抄録等の各データベースにおいて、データの更新ならびに追加入力をおこない、データの充実に努めた。また、業務用のデータベースについては、各担当で作成したデータの追加をおこなった。なお、データベースへの入力に際しては、事前のデータ整理が必要であるため、広い範囲の文献や参考図書等の調査をおこないながらデータの拡充をおこなった。

写真データベースの基礎となる写真の電子化に関しては、35mm、ブローニ、4×5、8×10、ガラス乾板、奈文研が発注した空中写真について電子化を継続した。航空写真データベースにおいては、入力の基礎となる原フィルムからのマイクロフィルム作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成を継続しておこなった。

●国際遺跡研究室の調査と研究

国際遺跡研究室は、研究所が主催する国際共同研究事業や支援協力事業を円滑に実施するための調整と外国からの訪問者に対する対応が主たる業務であり、業務課と連携しておこなっている。2005年度には、共同研究で招聘した外国人研究者は34名、施設見学や表敬訪問で研究所を訪れた外国人研究者は、6カ国75名であった。一方、科学研究費、招聘、共同研究費による研究所員の渡航者数は128名で、そのうち共同研究による渡航は62名である。

国際支援協力事業「西アジア文化遺産保護緊急協力事業」は東京文化財研究所と共同で実施しているが、本年度は国内及び現地において発掘調査法・保存修復科学に関する研修事業を分担し、研究所各部の応援を得てパーミヤン仏教遺跡において探査・試掘・分布調査等を実施した。

また、埋蔵文化財センターでは、国際協力事業団・日本国際協力センターなどの要請により、他機関が招聘した外国人に対しても研修事業をおこなっている

が、当研究室では研修内容や講師の選定などもコーディネートしている。2005年度には3件あり、合計26名に対し研修授業をおこなった。

これらの国際関係業務の他に、2005年度には埋蔵文化財発掘技術者専門研修『陶磁器調査課程』を担当し、他の研修授業の講師を務めた。また、当研究室は、山内清男資料の保管並びに貸し出しと資料閲覧希望者への対応の任務を担っている。2005年度には貸し出しは1件、資料を閲覧は2件あった。本年度の当研究室関係の出版物は、『山内清男考古資料16』奈良文化財研究所史料第74冊、『黄冶窯の考古新発見』奈良文化財研究所史料第73冊である。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国・韓国・カンボジアの3カ国の研究機関と次に述べるような学術共同研究を実施している。この他、アフガニスタンとイラク両国を対象とする西アジア文化遺産緊急保護事業にも協力している。2005年度の各事業の概要は以下の通りである。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

両研究所は、2001年度より5カ年計画で唐長安城大明宮太液池遺跡の共同発掘調査を実施してきた。太液池は蓬萊池とも呼ばれ、大明宮北部中央に位置する。これまでのボーリング調査・試掘調査・発掘調査によって、平面形は瓢形を呈し、東西最大長484m、南北最大長310m、面積17万㎡の壮大な規模を誇る苑池であることが知られている。東小池は民家密集地の下にあり、発掘調査は困難なため、主として西池の構造解明を目指し調査を実施してきた。2005年度は共同研究の最終年度に当たり、あまり知られていなかった西池東南岸部の状況を明らかにするため、春に大規模な発掘調査を実施した。調査の結果、池の南岸護岸施設や景石、池岸に沿う周遊道路、岸から池に突き出す棧橋状建物遺構、池に浮かぶ亭（浮見堂）、それと岸を繋ぐ欄干廊等の遺構が検出され、大明宮の構造解明、日中古代庭園の研究に対し貴重な資料を提供することになった。この調査には日方研究者が合わせて7名参加し、現地では共同記者発表で、日本では招聘の機会を

利用し中方研究者に公開講演会の場で発掘調査成果を発表頂いた。秋には安家瑤研究員を始めとする研究者5名を招聘。研究会を開催し、関連遺跡や遺物を視察するなどして共同研究をおこなった。また、太液池出土遺物を借用し、飛鳥資料館主催の「東アジアの古代苑池」展に出陳、あわせてこれまでの共同研究成果を公開した。発掘終了後には、双方発掘調査報告書作成の作業に執りかかり、日方は冬には研究者4名を派遣し、出土遺物の調査をおこなった。太液池の共同発掘調査の終結にともない、双方は次期共同研究に関する協議を重ねた結果、共同研究の継続と発掘調査の対象遺跡を北魏洛陽城とすることで合意し、国家文物局に申請した。現在許可待ちの状況であるが、3月には研究員2名が調査予定地を視察し、調査計画について中方と協議をおこなった。

●遼寧省文物考古研究所との共同研究

2002年度から4カ年計画ではじまった「3-6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」は、三燕時期の主要な墳墓ごとに、出土遺物について比較研究をおこなうことにしている。

2005年度には春に4名、秋には研究員2名を招聘し、関連遺跡・遺物の共同調査を実施し、招聘者には研究発表をお願いした。夏には研究員6名を派遣し、三燕遺物の観察・実測・写真撮影をおこなうとともに、遼西地域の三燕文化の遺跡を視察した。当共同研究も本年が最終年度であり、年度当初から日中両国の各研究者が論文の執筆にあたり、3月には一冊にまとめ共同研究成果報告として刊行した。双方協議の結果、共同研究を継続する事で合意に到り、3月には所長と研究員1名が瀋陽に赴き新共同研究の協約書の調印をおこなった。次期共同研究の新課題は、「朝陽地区隋唐墓出土遺物の研究」である。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2000年度から5カ年計画で実施している事業で、鞏義市大・小黄冶、白河村に所在する唐三彩窯跡及びその生産品に関する共同研究である。

6月1日、新共同研究に関する協約書を交換調印。春と秋に2回、河南省文物考古研究所が主導する白河窯の発掘調査に研究員を合わせて5名派遣した。発掘調査では、白瓷窯1基、工房跡1箇所、失敗品を捨て

た土坑などを検出。完形に復される器物は500点を超え、白瓷の外に黒釉瓷・青瓷・三彩の発見もあり、白河地区でも三彩が生産されていた事が初めて明らかになった。秋には研究者5名を招聘し、関連遺物・遺跡の共同研究をおこなった。3月には、研究者3名を派遣し、次年度の共同研究計画を協議策定し、合わせて白河村でおこなわれている窯跡の発掘調査現場を視察した。また、2002年・2003年の発掘成果を盛り込んだ図録『黄冶唐三彩窯の考古新発見』（日本語版）を刊行した。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

韓国国立文化財研究所とは、日本の都城並びに百濟・新羅王京の形成と発展過程に関する共同研究と生産遺跡・遺物に関する共同研究を実施している。この他、毎年短期ではあるが、両研究所は、様々な分野の研究員を相互に派遣し、学术交流を図っている。本年度には、文化遺産研究部歴史研究室の吉川聡主任研究員を派遣した。

生産関係の共同研究については、本年度は瓦を対象とし、秋に3名の研究者を派遣し、古新羅時代の製品を調査した。冬には、4名の研究員を招聘し、生産遺物の共同研究をおこない、都城遺跡関連遺跡の視察をおこなった。また、韓方研究員の方々に講師を依頼し、公開研究発表会を開催し、黄仁鎬氏には新羅王京の条坊に関する研究成果を披露いただいた。一方、日方も3名の研究者が訪韓し、新羅・百濟の都城関連遺跡発掘調査現場を視察し、合わせて出土遺物の調査を実施した。

これまでの韓国国立文化財研究所との学术交流と共同研究は、独立行政法人になる以前の1999年に締結した姉妹友好共同研究協約書に基づいておこなわれてきた。次年度から始まる次期5カ年の中期計画の策定に当たり、従前の各事業の見直しがおこなわれ、効率的で効果のある学术交流をめざすことになった。相手方と共同研究のあり方に関する協議を重ねた結果、合意に到り、12月20日、日本において韓国国立文化財研究所と独立行政法人文化財研究所との間で「共同研究交流協約書」が、奈良文化財研究所との間で「共同研究合意書」が取り交わされた。

●西アジア文化遺産保存修復のための緊急協力事業

アフガニスタン、イラクを対象とする文化遺産保護緊急協力事業であり、東京文化財研究所と共同で実施している。アフガニスタンに対しては、世界遺産バーミヤン仏教遺跡群の保存修復協力と現地人スタッフの養成のための研修事業を実施している。2005年度の研修事業は日本と現地の両方で実施し、日本では招聘した4名の研究者に対し、発掘調査法と遺物の整理・実測法に関する研修、遺物の保存修復に関する研修、建造物保存修復に関する研修を実習形式でおこなった。バーミヤン遺跡の保護事業は、遺跡の範囲確認に重点を置き、本年度も遺構の広がり把握のために仏巖の前面に広がる平地部分を対象に非破壊地下探査（レーザー探査法・電気探査法）をおこなった。また一部探査結果の検証を兼ね試掘調査も実施し、新たに塔の基壇を発見した。現地での研修は、バーミヤンに各地の研究者を招聘し、発掘調査と出土遺物の保存に関する研修を実習形式で施した。

イラクに対する緊急援助事業は渡航が困難な状況ため、もっぱら現地人スタッフを日本に招聘して実施しており、本年度もイラク国立博物館の担当者2名に対して保存修復科学に関する研修をおこなった。

●異なる環境条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究

当研究は、カンボジアの遺跡、遺物を対象に実施している。アンコール文化遺産保護に関する研究協力は1993年から開始し、これまでに3年を1フェイズとする3回9年間にわたる事業をおこなってきた。これまでに延べ35名の研究員交流をおこなうとともに、上智大学国際調査団と共同でバンテアイ＝クデイ遺跡やタニ窯跡群の調査研究をおこなってきた。2002年度からは4カ年計画でアンコール・トム内にある西トップ寺院跡を対象とした新たな共同研究事業を立ち上げ、発掘調査、遺跡探査、広域遺跡整備などの諸研究を、現地のAPSARA（アンコール地区遺跡整備開発機構）と共同で実施している。

西トップ寺院は、バイヨンの西約500mに位置する小型の石造寺院遺跡である。同寺院からは9世紀の碑文が発見されているものの、現存するものは建築形式などより10世紀に建立されたものと考えられ、それ以後13世紀から17世紀にかけて仏教寺院として再興され

たと推定されている。この共同研究では西トップ寺院の変遷を明らかにするにとどまらず、アンコール王朝崩壊後の中世の仏教寺院としての姿を明らかにし、この地の中世史をより一層、豊かなものにするをめぐらしている。また発掘現場を共同研究の場とすることによって、より実効性のある人材育成を進めることが可能になると考えている。

西トップ寺院での共同研究開始に当たり、2002年12月6日に現地においてAPSARA（アンコール地区遺跡整備開発機構）との覚書調印式をおこない、翌7日に現場で調査の歛入れ式を執りおこなった。当年度はこれに加えて、先立つ8月には、西トップ寺院調査の第1回目調査として、平板による地形測量を実施した。2003年度からは前面のテラス部分の発掘調査を進め、テラスの構築時期や鎮壇の様子を明らかにした。本年度もテラスの建築構造を明らかにするために引き続き調査を実施するとともに、あわせて結界石施設の構造解明を目的とした発掘調査もおこなった。2004年度からは、遺跡の保存のための保存科学的な調査も開始しているが、本年度は誘電率測定法により石造建築物周囲の土壌水分量とその分布を、自然電位法により地下水流の方向を調査した。また、例年通り若手研究者3名を招聘し、保存科学に関する研修を実施した。

海外からの主要訪問者一覧

- Datuk Wira Hj. Aahmad Rusli Joharie (マラカ州長官兼保存修復管理委員会委員長) 他19名/マレーシア/'05.4.6
- Kenneth Watt (ウエスト ディーン単科大学陶磁器修復科学生) 他4名/イギリス/'05.4.19
- 何 毓灵・安 阳队 (中国社会科学院考古研究所) /中華人民共和国/'05.9.20
- 京都大学東南アジア研究所 柴山守教授 招聘団一行/ベトナム/'05.10.4
- 金 奉建・金 容民 (国立文化財研究所) 他3名/大韓民国/'05.12.19~12.21
- Bobomulloev Bobomullo Saibmurdovich (タジク・スラヴ大学生) 他2名/タジキスタン/'06.1.11
- 姜 惠元 (韓国伝統文化大学伝統美術工芸学科学生) 他5名/大韓民国/'06.1.17
- 劉 曉南 (上海市文化広播影視管理局社文処副処長) 他13名/中華人民共和国/'06.1.18
- 襄 秉宜 (国立文化財研究所建造物研究室長) 他3名/大韓民国/'06.2.6~2.7
- 鄭 光龍 (韓国伝統文化大学教授) /大韓民国/'06.2.1~2.10
- 王 大民 (国家文物局教育處長) 他6名/中華人民共和国/'06.3.23
- 辛 龍飛 (国立慶州博物館) /大韓民国/'06.3.28~4.27

海外からの招聘者一覧

- 李 新全 (遼寧省文物考古研究所 副所長 副研究員) /中華人民共和国/'05.5.31~6.11
- 穆 后文 (遼寧省文物考古研究所 撮影技師 館員) /中華人民共和国/'05.5.31~6.11
- 王 琪 (遼寧省文物考古研究所 研究室副主任 副研究員) /中華人民共和国/'05.5.31~6.11
- 陸 博 (遼寧省文物考古研究所 資料室副主任 副研究員) /中華人民共和国/'05.5.31~6.11
- 白 雪松 (中国社会科学院考古研究所 助理研究員) /中華人民共和国/'05.10.12~10.24
- 張 春雨 (遼寧省文化庁 副庁長) /中華人民共和国/'05.10.15~10.26
- 王 晶辰 (遼寧省文物考古研究所 所長) /中華人民共和国/'05.10.15~10.26
- 張 志清 (河南省文物考古研究所 副所長) /中華人民共和国/'05.10.17~10.27
- 郭 向亭 (河南省文物考古研究所 科長) /中華人民共和国/'05.10.17~10.27
- 辛 革 (河南省文物考古研究所 副研究員) /中華人民共和国/'05.10.17~10.27
- 姜 涛 (河南省文物考古研究所 研究員) /中華人民共和国/'05.10.17~10.27
- 張 永俊 (河南省文物管理局 公務員) /中華人民共和国/'05.10.17~10.27
- 陳 良偉 (中国社会科学院考古研究所 副主任 研究員) /中華人民共和国/'05.10.20~10.24
- 博 麗兰 (中国社会科学院考古研究所 副処長) /中華人民共和国/'05.10.20~10.24
- 季 連琪 (中国社会科学院考古研究所 館員) /中華人民共和国/'05.10.20~10.24
- 龔 国强 (中国社会科学院考古研究所 副研究員) /中華人民共和国/'05.11.1~11.20
- 鍾 建 (中国社会科学院考古研究所 館員) /中華人民共和国/'05.11.1~11.20
- 安 家瑤 (中国社会科学院考古研究所 研究員) /中華人民共和国/'05.11.14~11.20
- 王 吉怀 (中国社会科学院考古研究所 研究員) /中華人民共和国/'05.11.14~11.20
- 石 自社 (中国社会科学院考古研究所 助理研究員) /中華人民共和国/'05.11.14~11.20

- 何 歳利 (中国社会科学院考古研究所 助理研究員) /中華人民共和国/'05.12.10~12.14
- 張 玉亭 (中国文物交流中心 副処長) /中華人民共和国/'05.12.10~12.14
- 金 有植 (国立慶州博物館 学藝研究官) /大韓民国/'06.2.20~2.24
- Srey Barang (王立芸術大学卒業生) /カンボジア/'06.2.21~3.10
- Pen Kesornicole (王立芸術大学卒業生) /カンボジア/'06.2.21~3.10
- Chheang Sreyneang (王立芸術大学卒業生) /カンボジア/'06.2.21~3.10
- 尹 炯元 (国立慶州文化財研究所 室長) /大韓民国/'06.2.22~3.3
- 田 庸昊 (国立扶餘文化財研究所 学芸研究士) /大韓民国/'06.2.22~3.3
- 韓 松伊 (国立扶餘文化財研究所 研究員) /大韓民国/'06.2.22~3.3
- 權 海五 (国立慶州文化財研究所 研究員) /大韓民国/'06.2.22~3.7
- 黄 仁鎬 (国立文化財研究所 学芸研究士) /大韓民国/'06.2.22~3.7
- Ea Darith (アプサラ主任研究員) /カンボジア/'06.3.6~3.15
- Lam Sopheak (共同研究事業現地整理担当者) /カンボジア/'06.3.6~3.1
- Loeung Ravatthey (共同研究事業現地整理担当者) /カンボジア/'06.3.6~3.1
- Sok Keo Sovannara (共同研究事業現地整理担当者) /カンボジア/'06.3.6~3.1
- 劉 俊喜 (大同市考古研究所) /中華人民共和国/'06.3.7~3.15
- 何 利群 (中国社会科学院考古研究所) /中華人民共和国/'06.3.8~3.14

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 大河内 隆之：アメリカ合衆国
'04.11.27～'05.9.24／古環境復元を目的とした年輪年代学に関する研究 文部科学省負担
- 松井 章：大韓民国
'05.4.10～4.14／金海会げん里貝塚の発掘指導 先方負担
- 岡村 道雄：中華人民共和国
'05.4.26～4.29／中国社会科学院との共同研究に係る協議 運営費交付金
- 川越 俊一：中華人民共和国
'05.4.26～4.29／中国社会科学院との共同研究に係る協議 運営費交付金
- 森川 実：中華人民共和国
'05.4.26～5.9／唐長安城太液池における日中共同調査 運営費交付金
- 栗野 隆：中華人民共和国
'05.4.26～5.9／唐長安城太液池における日中共同調査 運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国
'05.4.26～5.11／唐長安城太液池における日中共同調査 運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国
'05.5.5～5.13／唐長安城太液池における日中共同調査 運営費交付金
- 中村 一郎：中華人民共和国
'05.5.5～5.11／唐長安城太液池における日中共同調査 運営費交付金
- 森本 晋：中華人民共和国
'05.5.9～5.13／国際学会（ECAI:電子文化地図計画）出席・発表 運営費交付金
- 光谷 拓実：中華人民共和国
'05.5.10～5.13／2005年第35回国際考古科学学会において発表 運営費交付金
- 花谷 浩：大韓民国
'05.5.24～5.28／第17回馬韓・百濟文化国際学術会議への出席と研究発表 先方負担
- 松井 章：大韓民国
'05.5.25～5.29／金海会げん里貝塚の発掘調査参加 科学研究費
- 田辺 征夫：中華人民共和国
'05.5.31～6.4／研究打合せ及び鞏義黄冶唐三彩窟の発掘調査視察 運営費交付金
- 巽 淳一郎：中華人民共和国
'05.5.31～6.9／研究打合せ及び鞏義黄冶唐三彩窟の発掘調査視察 運営費交付金
- 神野 恵：中華人民共和国
'05.5.31～6.9／研究打合せ及び鞏義黄冶唐三彩窟の発掘調査視察 運営費交付金
- 箱崎 和久：大韓民国
'05.6.13～6.17／第2回日韓建造物文化財交流協会会議への出席と文化財建造物修理工事現場の視察 文化庁負担
- 降幡 順子：アフガニスタン
'05.6.13～7.5／バーミヤン遺跡壁画保存・調査 他機関負担
- 花谷 浩：大韓民国
'05.6.16～6.19／韓国古代瓦の調査ならびに研究打合せ 科学研究費
- 小澤 毅：大韓民国
'05.6.16～6.19／韓国古代瓦の調査ならびに研究打合せ 科学研究費
- 安田 龍太郎：中華人民共和国
'05.6.22～6.25／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 小林 謙一：中華人民共和国
'05.6.22～7.2／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 小池 伸彦：中華人民共和国
'05.6.22～7.2／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 花谷 浩：中華人民共和国
'05.6.22～7.2／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 金田 明大：中華人民共和国
'05.6.22～7.2／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 豊島 直博：中華人民共和国
'05.6.22～7.2／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア
'05.6.22～6.29／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の調査 科学研究費
- 牛嶋 茂：中華人民共和国
'05.6.25～6.29／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 吉川 聡：中華人民共和国
'05.7.1～7.11／中国紙素材文化財料紙調査及び中国伝統製紙見学 他機関負担
- 森本 晋：南アフリカ
'05.7.8～7.22／第29回世界遺産会議出席 他機関負担
- 毛利光 俊彦：カンボジア
'05.7.15～7.19／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア
'05.7.15～7.19／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 加藤 真二：大韓民国
'05.7.26～7.31／飛鳥資料館秋期特別展に関する資料調査 運営費交付金
- 松井 章：大韓民国
'05.8.8～8.12／金海会げん里貝塚の発掘指導及び動物資料検討 科学研究費
- 岡村 道雄：中華人民共和国
'05.8.10～8.17／是川遺跡ジャパンロード海外調査 他機関負担
- 島田 敏男：ベトナム
'05.8.15～8.22／ハタイ省ドンラム村家屋調査・打合せ 他機関負担
- 清水 重敦：ベトナム
'05.8.15～8.22／ハタイ省ドンラム村家屋調査・打合せ 他機関負担
- 箱崎 和久：ベトナム
'05.8.15～8.22／ハタイ省ドンラム村家屋調査・打合せ 他機関負担
- 中村 一郎：ベトナム
'05.8.15～8.20／ハタイ省ドンラム村家屋調査・打合せ 他機関負担
- 杉山 洋：カンボジア
'05.8.15～8.22／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の調査 科学研究費
- 神野 恵：カンボジア
'05.8.15～8.25／アンコールワット遺跡群西トップ寺院における第3次調査 運営費交付金
- 高橋 克壽：大韓民国
'05.8.18～8.21／「金工技術から見た倭王権と古代東アジア」の資料調査 科学研究費
- 清永 洋平：中華人民共和国
'05.8.22～8.26／中国社会科学院考古研究所における出土品の調査・写真撮影 運営費交付金
- 井上 直夫：中華人民共和国
'05.8.22～8.26／中国社会科学院考古研究所における出土品の調査・写真撮影 運営費交付金
- 岡田 愛：中華人民共和国
'05.8.22～8.26／中国社会科学院考古研究所における出土品の調査・写真撮影 運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国
'05.8.22～8.30／中国社会科学院考古研究所における出土品の調査・写真撮影および中国山東省における隋唐墓資料の調査 運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国
'05.8.29～9.1／「中国古代青銅器の生産と流通に関する基礎的研究」の中国青銅器調査 科学研究費
- 杉山 洋：中華人民共和国
'05.9.6～9.9／梵鐘国際シンポジウムへの参

加と発表 先方負担

●高瀬 要一：カナダ・アメリカ

'05.9.7~9.27/発掘庭園に関する研究・協議及び遺跡整備状況視察 運営費交付金

●箱崎 和久：中華人民共和国

'05.9.13~9.25/中国山西省に現存する木造塔を中心とする古建築の調査 科学研究費

●内田 和伸：大韓民国

'05.9.18~9.23/遺跡の整備・活用に関する国際比較研究 科学研究費

●松井 章：イギリス

'05.9.19~9.29/国際湿地考古学会出席 科学研究費

●深澤 芳樹：フィジー

'05.9.26~10.3/古人骨受傷痕の調査 他機関負担

●大河内 隆之：イタリア

'05.9.27~10.8/Euro Dndro大会における研究発表。イタリアにおける年輪年代学の研究事情調査 科学研究費

●小林 謙一：中華人民共和国

'05.9.28~10.1/日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費

●森本 晋：ベルギー

'05.10.1~10.9/第11回バーチャルリアリティ・マルチメディア国際会議出席、資料調査 運営費交付金

●杉山 洋：大韓民国

'05.10.1~10.4/月精寺聖寶博物館開館6周年記念国際学術会議における講演 先方負担

●田辺 征夫：大韓民国

'05.10.4~10.7/日韓共同研究に関する「姉妹友好共同研究協約書」及び「共同研究計画の覚書」の締結に向けた協議のため 運営費交付金及び先方負担

●安田 龍太郎：大韓民国

'05.10.4~10.7/日韓共同研究に関する「姉妹友好共同研究協約書」及び「共同研究計画の覚書」の締結に向けた協議のため 運営費交付金及び先方負担

●山崎 信二：大韓民国

'05.10.4~10.7/日韓共同研究に関する「姉妹友好共同研究協約書」及び「共同研究計画の覚書」の締結に向けた協議のため 運営費交付金及び先方負担

●高瀬 要一：中華人民共和国

'05.10.7~10.16/古代庭園調査研究 他機関負担

●光谷 拓実：大韓民国

'05.10.7~10.10/「先端考古科学日韓交流研

究会」参加 先方負担

●毛利光 俊彦：大韓民国

'05.10.9~10.15/日韓生産遺跡に関する共同研究 運営費交付金

●花谷 浩：大韓民国

'05.10.9~10.15/日韓生産遺跡に関する共同研究 運営費交付金

●林 正憲：大韓民国

'05.10.9~10.15/日韓生産遺跡に関する共同研究 運営費交付金

●降幡 順子：ベトナム

'05.10.9~10.15/「出土陶磁器の保存科学的研究」における資料調査、分析結果報告 科学研究費

●杉山 洋：中華人民共和国

'05.10.11~10.15/飛鳥資料館秋期特別展示品借用 運営費交付金

●加藤 真二：中華人民共和国

'05.10.11~10.15/飛鳥資料館秋期特別展示品借用 運営費交付金

●小林 謙一：大韓民国

'05.10.29~11.3/韓国内遺跡出土繊維製品関係の資料収集 他機関負担

●松井 章：大韓民国

'05.10.31~11.3/金海げん里貝塚の発掘指導 先方負担

●森本 晋：アメリカ合衆国

'05.10.31~11.5/電子文化地図学会2005年度第2回総会に出席 科学研究費

●高瀬 要一：大韓民国

'05.11.1~11.5/韓国伝統造園学会における研究発表 先方負担

●窪寺 茂：アフガニスタン

'05.11.7~11.18/パーミヤン遺跡壁画保存・調査 他機関負担

●小澤 毅：アフガニスタン

'05.11.7~11.25/パーミヤン遺跡壁画保存・調査 運営費交付金

●渡辺 丈彦：アフガニスタン

'05.11.7~11.25/パーミヤン遺跡壁画保存・調査 運営費交付金

●降幡 順子：アフガニスタン

'05.11.7~11.25/パーミヤン遺跡壁画保存・調査 運営費交付金

●金井 健：大韓民国

'05.11.20~11.23/国際シンポジウム“Palaces of the World and Changdeok Palace”に参加 先方負担

●鳥田 敏男：アフガニスタン

'05.11.21~12.5/パーミヤン遺跡調査 運営費交付金

●森本 晋：アフガニスタン

'05.11.21~12.13/パーミヤン遺跡調査、保存修復国際支援の専門家会議出席 運営費交付金

●巽 淳一郎：中華人民共和国

'05.11.24~12.1/河南省文物考古研究所との共同研究 運営費交付金

●森川 実：中華人民共和国

'05.11.24~12.1/河南省文物考古研究所との共同研究 運営費交付金

●小澤 毅：中華人民共和国

'05.11.30~12.9/中国北朝瓦の調査 科学研究費

●林 正憲：中華人民共和国

'05.11.30~12.9/中国北朝瓦の調査 科学研究費

●深澤 芳樹：大韓民国

'05.12.2~12.5/韓国内出土楽浪式土器、タタキ技法の検討 科学研究費

●毛利光 俊彦：中華人民共和国

'05.12.6~12.9/中国北朝瓦の調査 科学研究費

●崔 ゴウン：大韓民国

'05.12.10~12.18/建造物現地調査 科学研究費

●豊島 直博：カンボジア

'05.12.12~12.23/アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金

●巽 淳一郎：カンボジア

'05.12.13~12.17/アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金

●杉山 洋：中華人民共和国、カンボジア

'05.12.14~12.23/飛鳥資料館秋期特別展示品返却及びカンボジアにおける中世遺跡と日本人町の調査 運営費交付金 科学研究費

●加藤 真二：中華人民共和国

'05.12.14~12.18/飛鳥資料館秋期特別展示品返却 運営費交付金

●森本 晋：カンボジア

'05.12.16~12.21/西トッブ寺院の調査 運営費交付金

●降幡 順子：カンボジア

'05.12.17~12.23/アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 科学研究費

●松井 章：台湾

'05.12.21~12.29/プユマ族の民族儀礼に関する資料収集と実地調査 他機関負担

●巽 淳一郎：中華人民共和国

'05.12.21~12.24/展覧会等打ち合わせ 他機関負担

- 今井 晃樹：中華人民共和国
'06.1.10～1.20／中国社会科学院考古研究所との唐大明宮太液池に関する共同研究 運営費交付金
- 内田 和伸：中華人民共和国
'06.1.15～1.20／中国社会科学院考古研究所との唐大明宮太液池に関する共同研究 運営費交付金
- 中島 義晴：中華人民共和国
'06.1.15～1.20／中国社会科学院考古研究所との唐大明宮太液池に関する共同研究 運営費交付金
- 中村 一郎：中華人民共和国
'06.1.15～1.20／中国社会科学院考古研究所との唐大明宮太液池に関する共同研究 運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア
'06.1.16～1.21／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 肥塚 隆保：カンボジア
'06.1.16～1.21／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 高妻 洋成：カンボジア
'06.1.16～1.21／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 脇谷 草一郎：カンボジア
'06.1.16～1.21／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 神野 恵：中華人民共和国
'06.2.2～2.11／唐三彩資料の調査 科学研究費
- 箱崎 和久：中華人民共和国
'06.2.4～2.13／木造塔を模した石造塔の構造・意匠に関する研究 科学研究費
- 吉川 聡：大韓民国
'06.2.9～2.16／大韓民国国立文化財研究所との研究者交流 運営費交付金・先方負担
- 島田 敏男：ベトナム
'06.2.10～2.14／ベトナム伝統的集落の調査及び会議 他機関負担
- 小林 謙一：中華人民共和国
'05.2.11～2.15／遼寧省文物考古研究所との共同研究打合せ 運営費交付金
- 豊島 直博：大韓民国
'06.2.13～2.16／金属器の資料調査 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア
'06.2.14～2.21／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の調査 科学研究費
- 川越 俊一：台湾
'06.2.14～2.16／故宮博物院・歴史博物館蔵唐代文物の調査 運営費交付金
- 巽 淳一郎：台湾
'06.2.14～2.17／故宮博物院・歴史博物館他の藏品（唐三彩）の調査 運営費交付金
- 井上 直夫：カンボジア
'06.2.14～2.21／プノンクレン周辺の現地調査における空撮及び瓦・土器等撮影 科学研究費
- 小林 謙一：大韓民国
'06.2.18～2.25／東アジアにおける武器・武器の比較研究 科学研究費
- 井上 和人：ベトナム
'06.2.26～3.2／ハノイに所在するタンロン王宮遺跡に対して今後に予定されている国際支援策を講じるための基礎調査 文化庁負担
- 金井 健：スウェーデン、リトアニア
'06.3.8～3.17／遺跡の管理・運営・活用に関するヒアリング調査 運営費交付金
- 大林 潤：スウェーデン、リトアニア
'06.3.8～3.17／遺跡の管理・運営・活用に関するヒアリング調査 運営費交付金
- 小林 謙一：中華人民共和国
'06.3.8～3.15／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 田辺 征夫：中華人民共和国
'05.3.9～3.13／共同研究打合せのため 運営費交付金
- 清水 重敦：大韓民国
'06.3.14～3.16／日韓文化財建造物保存協力協議会出席 文化庁負担
- 川越 俊一：中華人民共和国
'06.3.15～3.20／次期共同研究に関する協議、唐代文物の調査 運営費交付金
- 巽 淳一郎：中華人民共和国
'06.3.15～3.20／次期共同研究に関する協議、唐代文物の調査 運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国
'06.3.15～3.20／次期共同研究に関する協議、唐代文物の調査 運営費交付金
- 小池 伸彦：中華人民共和国
'06.3.15～3.20／次期共同研究に関する協議、唐代文物の調査 運営費交付金
- 神野 恵：中華人民共和国
'06.3.15～3.20／次期共同研究に関する協議、唐代文物の調査 運営費交付金
- 千田 剛道：大韓民国
'06.3.20～3.25／日韓共同研究における都城の調査 運営費交付金
- 小田 裕樹：大韓民国
'06.3.20～3.25／日韓共同研究における都城の調査 運営費交付金
- 黒坂 貴裕：大韓民国
'06.3.20～3.25／日韓共同研究における都城の調査 運営費交付金
- 高橋 克壽：大韓民国
'06.3.22～3.25／「金工技術から見た倭王権と古代東アジア」の資料調査及びレビューを受けるため 科学研究費
- 松井 章：シリア
'06.3.23～3.31／シリア国内の遺跡を踏査し、新石器時代の遺跡から出土した動物遺存体の研究 科学研究費

公開講演会

第96回公開講演会

2005年5月12日

◆加藤 真二：東アジアの古代苑池

7から8世紀の東アジア諸国における苑池遺跡およびその出土遺物を概観した。唐には、生産や軍事などの機能をも担う広大な苑にともなう苑池と、宮内の皇帝の私的な生活空間で、政治、儀式、信仰、遊興等の機能をもった中・小型の苑の苑池があり、皇帝の権力を維持し、内外にそれを顕示する仕組みとして有効に機能した。大明宮太液池は後者の典型例であり、上陽宮園林遺跡の苑池は、後者の中でも、鑑賞や遊興用の皇帝の私的空間の色彩がより強い。新羅雁鴨池、渤海上京龍泉府苑池、飛鳥京苑池、平城宮苑池には、唐の苑池の強い影響を看取できるが、その他の諸国間での関連性も考慮する必要がある。また、具体的な意匠や造営手法は、各国の伝統的審美観や技術を反映する。なお、日本の苑池は、天武・持統朝に唐の影響下に萌芽し、奈良時代に確立したものであろう。

◆馬場 基：上咋麻呂の悔

正倉院文書中に伝来する上咋麻呂書状4通のうち、任官希望の書状（年未詳10月23日付）と、鯛を贈呈する書状（年未詳10月28日付）の2通をとりあげる。この2通の書状は、現在別々に成巻されている。しかし、近年の正倉院文書研究の成果を援用すると、二通ともおなじ帳簿に二次利用され、連貼されていた。日付も近接する、一連の書状と考えられる。

これをふまえて、書状の内容を整理すると、以下のようになる。宝亀3年10月23日に、その夕方以降人事が行われ、翌日発表という情報をつかみ、任官運動を行う。しかし、人事はなく、28日に鯛を贈る。『続日本紀』は、宝亀3年11月1日に人事の記事を載せる。28日の鯛も、任官運動にからんでのものであろう。

上咋麻呂の運動が成功したか否かは定かではない。ただ、鯛の送り状の、品名の上に「用不」と書かれている。不調に終わった可能性が高いといえようか。

なお、講演会という性格上省略した部分などもふくめて、「上咋麻呂状と奈良時代の官人社会」（『奈良史学』23、2005）として公表した。

第97回公開講演会

2005年10月1日

◆市 大樹：飛鳥の木簡

現在日本では約32万点の木簡が出土しているが、その約4%にあたる14,000点の木簡が飛鳥地域から出土している。その8割以上は、1997年度以降に出土したものである。報告者は飛鳥池遺跡（約8,000点）・石神遺跡（約3,000点）・酒船石遺跡（約400点）の木簡整理を担当しており、その体験にもとづく発表をおこなった。発表の構成は、1「飛鳥とは」、2「木簡とは」、3「飛鳥における木簡の出土状況」、4「木簡の時期をおさえる」、5「歴史上の有名人物」、6「飛鳥の役人たち」、7「地方から徴発された民衆－仕丁－」、8「石神遺跡出土の具注暦木簡」である。4では木簡に年紀が書かれていない際の年代推定方法、5では天武天皇とその皇子である舍人・穂積・大伯の生涯、6では勤務・査定・給与・手習の実態、7では地方から送り出された仕丁と呼ばれる労働者の生活が地元の支援によって支えられていることなどを述べた。

◆神野 恵：古代の文房具

古代の律令官人の必携品である文房具について、発掘調査で出土した資料を中心にアプローチした。文房四宝といわれる硯、筆、墨、紙については、正倉院に残る伝世資料がよく知られているが、これらが国家の一級品であるのに対し、宮都の発掘調査で出土した資料は一般的な文房具の在り方に迫るものである。文房四宝のなかでも発掘で出土するのは陶硯が圧倒的に多い。7、8世紀には円面硯が一般的であるが、8世紀後半頃から唐の影響を受けて風字硯に転換していくことが知られている。平城宮など官衙地区や寺院の発掘調査では、本来は食器である須恵器を転用して硯として使用したものが圧倒的に多い。発掘出土品のあり方は、陶硯がいかに貴重であったかを物語る。また、筆や墨は土中で腐朽するため出土品は稀少であるが、平城京では胞衣壺から出土したものが残っており、律令制下で子の立身出世を願う風潮を垣間みることができる。

研究集会

◆古代の土器研究会

第8回シンポジウム 一聖武朝の土器様式一

2005年11月19～20日

古代の土器研究会では、隔年でシンポジウムを開催しているが、今回は聖武朝の土器に焦点をあてた研究会を開いた。四半世紀にわたる治世の間に聖武天皇は、恭仁宮、難波宮、紫香楽宮とめまぐるしく宮都を遷した。聖武朝は平城宮の土器の区分でいう平城土器Ⅲにあたり、この時期の平城宮の土器群の様相について、実物を観察しながら再確認するとともに、近年各地ですすめられてきた宮殿遺跡や関連遺跡の資料と比較することによって、都の移動と土器様式の変化、あるいは宮都と各地方の土器様相の比較などについて論じた。

発表内容は高橋照彦「聖武朝の土器様式－研究現状の整理と問題の提起－」、神戸恵「聖武朝の土器－平城宮－」、奈良康正「恭仁宮」、市川創「難波地域の土器様式」、畑中英二「聖武朝の土器－紫香楽の事例を中心に－」、妹尾周三「安岐地域－安岐国分寺出土資料を中心に－」、吾妻俊典「奈良地代における多賀城の土器」、渡辺一「聖武朝の土器様式－武蔵とその周辺－」、武田恭彰「備中に於ける8世紀代の土器様相」、中島恒次郎「聖武朝の土器－九州(太宰府と周辺)－」の計10本。各地から約80名が参加した。(神戸 恵)

◆保存科学研究集会

2005年12月9日

高松塚古墳は発見から三十数年が経過し、その間の生物的劣化や環境変化などにより壁画の劣化が問題化したため2005年6月におこなわれた検討委員会において解体修理が決定された。またキトラ古墳ではすでに剥ぎ取り修理が開始されているなど、古墳壁画の保存問題が大きくクローズアップされている。そこで全国の保存科学の専門家を対象に「保存科学における諸問題－キトラ・高松塚古墳壁画の保存科学と修理－」をテーマに、これまでの取り組みなどについて情報交換と討論をおこなった。口頭発表では、「現状と問題点に関する基調報告」につづき、水分の挙動や生物的要因に対する保存対策、キトラ古墳の「壁画の取り外しと保存修理」、石造文化財の強度に関す

る実験や診断技術、高松塚古墳の「石室構造調査と解体実験」などの7件がおこなわれた。さらに8件のポスター発表では、詳細な写真や試料・模型を前に多くの参加者が質問を投げかけるなど、本研究集会を通じて古墳壁画の問題についての共通認識が高まったといえる。多数の参加者からは、95%を超える「有意義であった」との回答が得られた。(肥塚 隆保)

◆古代官衙・集落研究会

2005年12月16～17日

2005年度は「在地社会と仏教」をテーマに開催した。これは、地方の集落遺跡内で発見されることが多い、いわゆる「村落内寺院」や、畿内における行基関係寺院などの考古資料や『日本霊異記』などの文献史料を主な素材としてとりあげ、考古学と文献史学との両分野から、「村落内寺院」の構造や変遷のありかた、村落社会における仏教普及・仏教受容の実態、在地社会における仏教の役割などについて、現状での調査・研究成果を整理し、問題点の共有化を図ることを目的としたものである。

研究報告は、近藤康司「畿内における民衆と仏教」、内田律夫「古代村落祭祀と仏教」、宮田浩之「西国における在地仏教と仏教受容」、冨永樹之「『村落内寺院』の構造と展開」、笹生衛「古代東国集落と仏教信仰」、太田愛之「文献史学から見た村落社会と仏教」、鈴木景二「地方社会における仏教の受容と都鄙往還」の7本で、総合討議をおこなった。地方公共団体・大学関係者等166名が参加し、討議をおこなった。アンケートでは9割以上の参加者から有意義であったとの回答を得た。(山中 敏史)

◆第9回古代瓦研究会

飛鳥白鳳の瓦づくり－雷文縁・輻線文縁・重圏文縁の複弁蓮華文軒丸瓦の展開－

2006年1月28～29日

白鳳期の複弁蓮華文軒丸瓦のうち、外区の文様が雷文縁のもの(紀寺式)、輻線文縁のもの(檜隈寺式)、重圏文縁のもの(石川寺式)についての、年代・文様・技法・広がりを検討する研究会である。

雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦(紀寺式)としては、まず標式となる紀寺(小山廃寺)式の特徴を把握し、初源年代を670年代後半とし、次いで摂河泉の諸例と比較して摂河

泉の独自の特徴が判明した。山背の雷文縁は8種の範型を確認し、大宅廃寺・醍醐御霊廃寺の瓦を最古式とした。北陸江沼の雷文縁については、平面的な文様は似るが立体的な紀寺式特有の半球状の断面にならず、重弧文軒平瓦と組み合わさらない点で、中央と直接の関係を持たないこと、関東上総の雷文縁(二日市場廃寺)は、大和小山廃寺の雷文縁軒丸瓦の組合せの要素をかなり多く持っていることが判明した。

輻線文縁蓮華文軒丸瓦(檜隈寺式)については、まず近江穴太廃寺で単弁の軒丸瓦の中に輻線文縁が出現(7世紀中頃)し、次いで檜隈寺例は朱鳥元年(686年)をやや遡る頃、近江の輻線文縁複弁蓮華文は檜隈寺より新しいことを確認した。

重圏文縁蓮華文軒丸瓦(石川寺式)については、石川寺例が最古で、天武朝前半の年代であり、軒丸瓦の製作技法としての片ほぞ形加工が天武朝に存在したことを確認した。(山崎 信二)

文部科学省科学研究費補助金

◆生活生産遺跡出土資料研究に基づく近世科学技術の比較研究の総合化

代表者・村上 隆 特定領域研究 継続

本研究は、生活生産遺跡の発掘によって出土した実資料を対象に、最新の材料科学的手法により、材質や製作技術の解析によって得た情報を、従来から蓄積されてきた伝世器物資料や文献史料に関する研究成果と相互補完的に比較検討し、近世期の科学技術の総合化・体系化をはかることをめざしている。本研究により、発掘による出土資料を一次資料に加えることができるようになることは、近世黎明期科学技術の研究の学問的広がりを求めるためにも意義は大きい。さらに、わが国の古代から現代にわたる通史的・重層的視野のもとに、近世技術の評価する物証的基盤が培えるものと考えられる。

特に、近世科学技術の根幹を担う金属の関係では、世界的にみても最高水準にまで到達した近世技術の礎となった古代金工に用いられた材料と技術の変遷を追う調査をおこなうと共に、近世における採鉱から精錬に至る金属素材を得る技術、いわゆる鉱山・冶金技術、さらにはさまざまな器物の製作技術の再評価をおこなった。

その成果は学会やシンポジウムを通して、一般に公開してきた。特に、シンポジウム『生産遺跡から探る「モノづくり」の歴史』をシリーズで開催し、今年度は、第4回「佐渡金銀山遺跡を見る視座 - 内から見る・外から見る -」（佐渡市あいかわ開発総合センター：平成17年7月2日）、第5回「地域教育における生産遺跡のあり方 - 石見銀山遺跡からの発信 -」（鳥根県大田市 サンレディー大田：平成17年2月11日）を開催し、大きな成果を挙げた。

◆カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究

代表者・杉山 洋 特定領域研究 継続

ポニャールーの日本人町想定地では、第一回目の発掘調査をおこなった。2カ所に調査区を設定したが、想定したような遺物量ではなく、来年度以降位置を変えて調査区を設定する必要がある。調査と併行しておこなった表探調査で、肥前磁器を採集することができた。

ソサイ窯跡では第3次調査をおこない窯

壁を確認するとともに、考古磁気の調査サンプルの採集をおこなった。

◆遺跡の整備活用の現状と問題点に関する事例的国際比較研究

代表者・内田 和伸 特定領域研究 継続

平成17年度は、2カ年の最終年度で、大きくは以下三つの調査研究をおこなった。①国内の遺跡整備活用に関する資料の収集、②平城宮第一次大極殿院を事例とした地盤整備案の検討、③海外の遺跡の整備活用事例の調査（イギリス・韓国）。特に②では、宮殿の本来の設計思想を明らかにし、その文脈の延長上で整備する必要性を指摘した。

◆推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究（S） 継続

5カ年計画の3年次にあたり、a文字画像データベースの開発、b文字画像鮮明化のためのシステムの開発、c木簡解読のための支援データベース群の構築、d文字自動認識システム（OCR）の開発の4項目につき、引き続き研究・開発を進めている。

まずaについて。昨年度WEB公開した木簡の文字画像データベース「木簡字典」は好評を得ており、2006年2月末のアクセス件数は17,000件に達している。本年度は、複数文字検索システムの開発をおこない、2006年度の早い段階における公開に向けた見通しを得た。画像データの拡充にはなお時間と労力を要する見込みである。

次にc・dについて。昨年度入力した地名に引き続き、物品名、人名の入力をおこなった。そして、研究分担者の東京農工大学の中川正樹先生の研究室において、これらに基づいた文脈処理モジュールを設計・開発し、昨年度試験開発したオフライン木簡文字解読支援システム「mokkan shop」に実装してその有効性を確認した。

今後は個々に研究・開発した個別のシステムを、総合的な木簡釈読支援システムとしてどう構築していくかが大きな課題となる。

◆東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究 - 特に豚、馬、牛について

代表者・松井 章 基盤研究（A） 継続

本年度は、韓国慶南考古学研究所の実施する金海市金海会峴里（キメフェヒョンニ）貝塚の発掘に参加し、動物考古学的研究を

おこない、ウシ、ウマの出現時期に関する研究をおこなった。本貝塚は戦前に京都大学の浜田青陵、梅原末治らによって発掘された、日本の弥生時代中期から後期に併行する著名な貝塚である。

松井は平成17年3月に最初に現地を訪れ、5月、6月、8月、11月と現地へ赴き、動物遺存体を分析し、発掘技術を指導した。その結果、遅くとも紀元前1世紀には朝鮮半島の南端まで牛馬が移入されていたことを明らかにできた。その他では、昨年度2月に引き続き、昨年12月に台湾台北所在の中央研究院、歴史言語歴史研究所のリー・クワンチー博士を訪問し、特に台南の遺跡を踏査し、共同研究の打ち合わせをおこなった。



浙江省で新石器時代の遺跡出土の動物遺存体を調査中（数万点の哺乳類の骨が出土している）

◆GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総合的研究

代表者・井上 和人 基盤研究（A） 継続

研究最終年度を迎え、基礎データの整備と利用について検討をおこなった。

条坊データについては、各調査機関でおこなわれたデータを整理、検討した。整理したデータより不規則三角網（TIN）モデルを生成し、地理情報システム（GIS）上でこれを表示した。この結果、各条坊側溝における流路の流出方向をまとめることができ、排水系統を考える上で統合された形式でのデータの提示が可能になることを示すことができた。

その中でも、南北方向の幹線水路と、東西方向の水路においては、溝底の高さに大きな差が見られる部分があり、常時水が流れている部分と、水が流れない部分が存在する可能性が指摘できる。これらの状況を分散的に保存されていた既存の調査データを活用して視覚的に提示することが達成できたことは大きな成果である。

また、これらのデータを多くの分野の研究者と共有するために、データの整理をおこない、公開の準備を進めている。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・花谷 浩 基盤研究(A) 新規

5世紀の日本列島において、古墳の副葬品として次第に普遍化していく外来的要素のなかでも、馬具、武器・武具、金銅製品を中心に、その製作技術の検討も含め、中国遼西地域の4～5世紀を中心とする三燕文化の墳墓副葬品との比較検討をおこなった結果、日本列島に対して三燕文化が及ぼした影響は、高句麗や韓半島南部を経由したものであったと考えられるにいたった。

◆古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究

代表者・毛利光 俊彦 基盤研究(A) 新規

本研究は、日本・韓半島・中国の8世紀初頭頃までの瓦について、各国ごとに文様や製作技術の変遷を把握し、国を越えた技術伝播の様相を解明することを目的としている。初年度にあたる本年度は、まず韓国の慶州地域出土の古新羅～統一新羅初期の瓦と、中国の北魏平城城および東魏北齊鄴城の瓦の調査を実施した。あわせて、両国の研究者を日本に招聘し、意見交換をおこなった。

◆文化財資料用携帯型マルチレーザーラマン分光分析装置の基礎的開発研究

代表者・高妻 洋成 基盤研究(B) 継続

初年度に試作した装置に対してさらに改良を加え、2本の励起レーザーを搭載した携帯型のレーザーラマン分光分析装置を完成した。本装置ならびに既存の装置を用いて標準試料及び考古遺物のスペクトルの蓄積をおこなった。これまで得られたスペクトルおよび本装置を活用することにより、考古遺物の非破壊非接触分析法のひとつとしてレーザーラマン分光分析法を適用できるようになった。

◆古代官衙の造営技術に関する考古学的研究

代表者・山中 敏史 基盤研究(B) 継続

今年度は、関東以北の官衙遺跡の収集資料の一部を地方官衙関係遺跡データベースとして奈良文化財研究所ホームページに公開した。このデータベースを活用した廂の出についての統計的分析により、8世紀末以降に広廂が増加する傾向を見いだせた。

また、古式のものとする意見もあった梁行3間の建物は、8世紀後半以降においても多用されており、时期的な特徴とはみなしがたいことも判明した。総柱高床倉庫遺構については、側柱掘方が束柱掘方より大型で側通し柱構造の可能性が高いとみられる例は、全体の一割強で、桁行5間以上になるとその割合は内外柱穴規模が同じものに近い数となる。これは長大な倉には板倉が多かったことを裏付けると考えられる。また、3×3間の倉は2×2間の倉に次いで多いことが明らかとなり、それを正倉の典型例であるとしてきた従来の見解を検証できた。また、関東にみられる隅柱面取り状掘方は、集落に多く認められ、在地の技術が官衙造営にも導入されたことを示唆するが、建物構造との関連性などさらに検討を進めたい。

◆富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究

代表者・松村 恵司 基盤研究(B) 継続

本年度は、和同開珎の銭文論争に関わる研究史を整理し、和同開珎の読みと銭文の出典を明らかにした。また「全国出土和同開珎集成」作業の一環として、東日本の出土事例の集成と検討をおこない、出土例の大半が経済外的使用法によることを明らかにし、その類型化をおこなった。平成18年1月28・29両日には研究集会「和同開珎をめぐる史的検討」を開催し、考古学・文献史学・古泉学等の研究者40名ほどで、これまでの和同開珎研究を総括し、研究の争点を明らかにした。

研究集会では、「和同開珎をめぐる諸問題」、「写経所をめぐる銭貨流通」、「和同開珎の価値の変遷」、「初期貨幣における私鑄銭」、「木簡からみた長登銅山の経営」、「長門の産銅と採掘・製錬技術」、「古代銭貨の経済外的使用法とその淵源」の研究発表と同時に、和同開珎全国出土集成に向けて、本年度は東日本を対象に、以下の集成結果の報告を受けた。「北海道～東北における和同開珎」、「関東出土の和同開珎」、「北陸地域の和同開珎」、「中部地域の和同開珎」、「東海地域の和同開珎出土事例」。これらの出土事例報告から和同開珎の経済外的使用法の実態が明らかになり、総合討議では和同開珎をめぐる活発な議論が展開された。研究集会の討議内容は、来年度に記録集として刊行する予定である。

◆霊廟建築における荘厳手法の総合的比較研究

代表者・窪寺 茂 基盤研究(B) 新規

本研究は、全国各地の霊廟建築を対象として、その構造・意匠・装飾技法面からの調査研究をおこない、近世における霊廟建築の荘厳に関わる設計理論・手法を明らかにし、当時の建築文化の実像を究明することが目的である。

初年度である本年度は、既往研究等の建造物情報から調査対象となりうる建築を抽出してそのデータ化をおこなうとともに、福島県相馬市、名古屋市所在計8棟の霊廟建築の現地調査を実施した。調査では改造箇所の確認、意匠の時代判定のための詳細観察をおこない、建立当初の建築意匠内容を把握した。次年度以降も同様の作業をおこない、情報の集積を図る。



霊廟建築現地調査 名古屋建中寺本堂・渡廊

◆戦国期、織豊期、江戸前・中期における瓦生産の地域別比較研究

代表者・山崎 信二 基盤研究(C) 継続

近世鹿児島・熊本・長崎・福岡・大分・愛媛・高知・鳥取・島根・山口・広島・岡山の瓦編年をおこない、8期に細分した。また名護屋城と近世唐津の瓦について分析し、天守の瓦の特殊性と建物解体による瓦の移動を明らかにした。静岡県産の瓦については、天正18年を遡る姫路系瓦が存在することを明らかにした。

◆古墳出現期における土器生産流通体制の研究

代表者・次山 淳 基盤研究(C) 継続

今年度は、本研究課題の最終年度にあたるため、収集した基礎資料の整理を中心に実施した。

成果報告書では、吉備形甕の分布から当該期の交通・流通のありかたについて検討し、176遺跡603点の基礎資料をもとに、北部九州から瀬戸内海、大阪湾をへて大和へいたる交通路とその結節点となる主要な遺

跡の分布状況を確認した。また、畿内における古墳出現期の地域構造についても言及した。

◆東アジアにおける弥生時代タタキ技法波及経路の研究

代表者・深澤 芳樹 基盤研究(C) 継続

本研究は、アジア地域のタタキ技法の検討をとおして、日本列島における弥生土器タタキ技法の波及経路を特定しようとする試みである。本年度は、日本列島ばかりでなく、大韓民国や中華人民共和国で土器の観察・研究者との意見交換をおこなった。特に大韓民国では、江原道考古学会に参加し、無文土器の実態、さらに楽浪式土器の出土状況をおさえることができた。また中華人民共和国で広州市出土土器を観察した。

◆古代の宮殿および官衙の占地に関する復元的研究

代表者・小澤 毅 基盤研究(C) 継続

本研究は、近年の考古学的調査の進展を承けて、7世紀以前の宮殿の所在を具体的に推定し、占地上の通有の特徴ならびに時代や地域による変化を把握することを目的としている。本年度は、所在がいまだ判明していない6～7世紀の諸宮をおもな対象として、文献史料との整合性や占地の面から具体的な候補地を選定し、それぞれの妥当性を検証する作業に着手した。

◆古代冶金工場の基礎的構造に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦 基盤研究(C) 継続

本年度は、7世紀以降の小型冶金工場の類型に関して分析を進め、古墳時代以来の伝統的形態を継承した工房と、奈良時代後半～末以降に導入された新技術で操業したとも考えられる工房に分けられることが明らかとなった。また、古墳時代では畿内政権周辺部の工房を分析し、その構成要素が少なくとも藤原京の段階までは知られるが、奈良時代以降には今のところ認められないことが判明した。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究—騎兵装備を中心に—

代表者・小林 謙一 基盤研究(C) 継続

中国において、主として漢代以降に普及した鉄製甲冑について、構成する鉄板の形状、重ね方、綴じ方を中心に分析し、韓半島や日本列島で出土する甲冑と比較検討し

た。その結果、中国東北地方においては、遅くとも4世紀代に、重装騎兵装備が成立していたと考えられるとともに、重装騎兵装備に関して、中国東北地方から韓半島にいたるまでは、同一の系譜で捉えうることが明らかになった。

◆金工技術から見た倭王権と古代東アジア

代表者・高橋 克壽 基盤研究(C) 継続

5世紀前半の導入期の金工製品は、倭王権が新羅に倣って入手したものであった。その後、倭の金工技術の水準は低い状態が続くが、この間、王権とは別に独自に金製耳飾や馬具を入手する地方豪族も現れた。それらの製作地を伽耶と見る定説的理解には金工技術の視点からの再検討が必要である。それにより、6世紀に百済の影響下に展開する倭の装身文化が理解できるようになると考えられた。

◆住宅系伝統的建造物の保存修復と居住環境整備手法の研究

代表者・島田 敏男 基盤研究(C) 継続

本研究は、伝統的な建造物を保存し、かつ普通に居住するための方策を研究するものである。本年度は、ヒアリング調査によって伝統的建造物での居住実態を明らかにし、いっぽうで、昨今流行している民家再生事例について、事例集と検討をおこなった。今後、保存の目的や制度に則した修理・改造のガイドラインを検討する予定である。

◆マイクロフォーカスX線CTを用いた木造文化財の非破壊年輪計測に関する基礎的研究

代表者・大河内隆之 若手研究(A) 継続

本研究では、マイクロフォーカスX線CTを用いた木造文化財の非破壊年輪年代測定技術の確立をめざしている。日本の木造文化財の代表樹種である針葉樹のスギ・ヒノキを中心とした昨年度の研究に引き続き、今年度はヨーロッパの年輪年代学の主要対象である環孔材のナラ・散孔材のブナなどについても研究をおこなった。

本研究によって確立をめざしている非破壊年輪年代測定技術は、針葉樹のみならず環孔材や散孔材にも適用可能であることが実験によって確認され、木造文化財への応用が期待される。

当研究によって特許出願中の技術内容については、特許公開2006-078251として公開されている。

◆7世紀出土文字史料の研究—書風と全国出土遺構に関する情報収集—

代表者・市 大樹 若手研究(B) 継続

本研究では、全国の7世紀木簡に関する情報を広く収集した上で、書風を中心に検討をおこなっている。本年度は、7世紀木簡の中心を占める飛鳥・藤原地域出土木簡の整理・検討をおこない、その成果の一端を発掘調査機関の報告書・概報・紀要や木簡研究などに執筆するとともに、全国の7世紀の荷札木簡339点の写真・釈文・解説をつけた『評制下荷札木簡集成』を刊行した。

◆中国古代青銅器の生産と流通に関する基礎的研究

代表者・今井 晃樹 若手研究(B) 継続

本年度は、青銅器鑄造法の調査を中心におこなった。器の内外面にあらわれる範線の位置をもとに、鑄型の合わせ方、鑄型の形や数を復元する調査に重点をおいた。また、把手や脚のある器については、本体との接合の仕方を調査した。国内の収蔵資料のほか、中国では北京、上海、陝西省の博物館に収蔵されている資料を調査した。

また、これまで収集した資料を整理し、中国古代における青銅器鑄造法についての時代的变化を明らかにする。



上海博物館にて

◆東アジア圏における歴史的建造物保存・修復理論の比較研究

代表者・清水 重敦 若手研究(B) 継続

本年度は、研究の最終年度にあたるため、これまでの研究成果を踏まえつつ、不足する情報を文献の翻訳などで補い、日、中、韓3国における建造物保存・修復理論を、各国建造物の構造的特徴と近代における修復理論の導入経緯の差異から比較検討した。また、研究成果のまとめを兼ねて、ACCU文化遺産保護協力事務所の木造建造物保存修復に関する集団研修において講演をおこなった。

◆出土陶磁器の保存科学的研究—表面の光学的物性変化と保存処理—

代表者・降幡 順子 若手研究(B) 継続

本研究では、陶磁器表面に形成されている釉薬の光学的物性と風化状態に着目し、保存修復処理に関する基礎的研究をおこなっている。本年度は、東アジア・東南アジア出土陶磁器片について、表面の状態に関する調査データの蓄積を重点的におこなった。特に釉層の微細構造の詳細な調査をおこない、結晶が観察される場合は、X線による構造解析から結晶の同定をおこなった。

◆劇場としての利用にみる寺社や史跡等の歴史的空間の特性

代表者・中島 義晴 若手研究(B) 継続

本年度は代表的な事例を調査、考察した。その結果、その場所の歴史や文化財としての価値の理解に役立てられ、地域の活性化につながっている催事の事例が多いことが確認された。一方、主催する側は歴史・文化的な雰囲気だけではなく、地形や空間構成にも着目している傾向があることがわかった。

◆東アジアの鉛釉陶器—考古資料にみる鉛釉陶器生産と唐三彩の影響

代表者・神野 恵 若手研究(B) 新規

唐長安城大明宮太液池および河南省黄冶窯の発掘調査で出土した唐三彩の観察記録の整理をすすめた。本年度は主要な唐三彩の産地のひとつである陝西省銅川黄堡窯を実見し資料収集をおこなった。黄冶窯との比較を通じて各窯の特徴を整理するとともに、太液池出土資料との比較研究をおこなう基礎データを収集した。上海国立博物館や陝西歴史博物館などを訪れ、唐三彩資料の収集もおこなった。



中国陝西省の耀州窯遺址の遺構展示館

◆弥生・古墳時代における日韓墳墓出土鉄製武器の比較研究

代表者・豊島 直博 若手研究(B) 新規

研究初年度の今年度は、日本の前期古墳

出土の刀剣とヤリ、韓国の原三国時代の刀剣と矛を集成した。さらに、国内の資料と韓国東南部の資料の実測と写真撮影を広くおこなった。その結果、日本の刀剣装具の全体像と製作技法を把握し、分類、編年、地域性について新たな展望をもつことができた。また、韓国の刀剣装具と日本のものとの共通点と相違点が見えてきた。

◆古代東アジアにおける木造塔の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久 若手研究(B) 新規

中国の山西省と福建省の現存塔を中心に実見・調査した。八角五重の仏宮寺釈迦塔(応県、1056年)は、横材や筋違で緊結して内部に無柱空間をつくり、入側を各辺1間とし、柱上から放射状に組物を出して、側まわりは各辺3間とする。八角平面ならではの技法もあるが、巨大な塔の内部の構造が、韓国や日本の巨大な塔にも応用できるか、今後検討しなければならない。

◆古代中世の建築用語とその規格—造営史料と建築部材の検討を通して—

代表者・西田 紀子 若手研究(B) 新規

古代中世の造営関連用語を収集し、分析することで、当時の材料調達や造営の実態解明をめざす。古代中世の造営史料はある程度まとまった点数が残存し、すべてを短時間で網羅することは難しい。そこで、平安時代末から戦国期にかけての建築用語を、東寺文書を中心に収集し、他の寺社史料や地方自治体史収録史料により適宜補足していくこととする。本年度は建築用語のデータベース作成のため、東寺百合文書所収の算用状・売券などをリスト化し、データを試験的に入力した。また、用語の地域性を把握するため、都道府県史所収の資料についても調査を継続している。

◆中世寺院建築における意匠表現の日韓比較研究—斗拱の表現方法を中心に—

代表者・崔 ゴウン 特別研究員奨励費 新規

本研究は東アジア木造建築の特徴的な要素である斗拱に注目し、日・韓中世寺院建築における意匠表現を比較することで、両国建築の共通点と相違点を抽出することをめざす。見出された共通点は日・韓が同じ木造建築文化圏であることを、相違点は同じ木造建築文化圏であるにも関わらず両国建築が有す独自性を示唆する。今年度は斗拱形式の中でも中世に中国から新たに

日・韓に導入された詰組(韓国では‘多包’という)に焦点を合わせ、対象となりうる中国・韓国・日本寺院建築のリストアップ、基礎図面収集、そして日本(近畿地方)と韓国(慶尚南道)の現地踏査をおこなった。今後は今年度のデータをもとに、斗拱を通じて中国の建築要素が日・韓の中世寺院建築にどのような影響を与えたのか、中国建築に対する日・韓の受容態度も検討していく予定である。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2005年7月1・2日に第17回総会および研究会をおこなった。

7月1日：総会 参加者121名（含委任状）・講演 参加者87名「仏像写真の世界」（金井杜男氏；研究会顧問）

7月2日：講演 参加者106名「被災写真の救済」（川瀬敏雄氏；堀内カラー）公開講座 参加者105名「遺跡撮影私の場合」

1日目は研究会顧問で京都国立博物館を退官した金井氏による仏像撮影の極意を講演いただいた。2日目は前年から相次いでいる自然災害で被災した文化財写真原板を救済する現場に携わった川瀬氏に、救済への可能性や問題点、写真原板の防災対策についてご講演いただいた。3回目となった「私の場合」は埋蔵文化財調査における遺跡撮影に関して実例を挙げてレクチャー形式で村井氏に講演していただいた。日頃おこなっている遺跡撮影の中でわき起こる問題や技術面での悩みなどに質疑形式でパネルを交えて説明をおこなった。（中村 一郎）

◆日本遺跡学会

日本遺跡学会も設立から3年目に入り、学会誌である『遺跡学研究 第2号』を刊行するなどようやく学会としての活動も軌道にのってきた。

2005年11月26・27日には2005年度大会を東京藝術大学において開催した（参加者180名）。初日は3本の講演、二日目は7本の研究発表と「史跡整備の現状と展望」というテーマのもとに討論会をおこなった。今年度の大会は遺跡の整備・活用が中心テーマであったが、会員および一般参加者の関心も高く、盛況であった。

4年目にあたる2006年度は、再び奈良に戻り大会を開催することとなった。これを期にさらに会員を増やし、活発な活動を展開していきたい。（高瀬 要一）

◆木簡学会研究集会

2005年12月3・4日、第27回木簡学会総会・研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した（参加者154名）。3日は総会のあと、井上和人氏（奈良文化財研究所）に「出土木簡籌木論」という木簡研究者にとってはある意味で衝撃的な研究報告をいただいた。木簡と遺構との関

わりや、木簡廃棄論の根本に関わる問題提起と受け止めた。引き続き、山本崇「2005年全国出土の木簡」により全国の木簡出土情報を概観した。また、山下隆次（香芝市教育委員会）・鶴見泰寿（奈良県立橿原考古学研究所）両氏に、出土まもない奈良県香芝市下田東遺跡出土木簡についてご紹介いただいた。4日は秋田県胡桃館遺跡出土木簡について榎本剛治（北秋田市教育委員会）・高橋学（秋田県弘田柵跡調査事務所）・山本崇・吉川真司（京都大学）の各氏に、また平城京跡左京四条三坊九坪（東堀河）の調査と出土告知札について宮長秀和（奈良県立橿原考古学研究所）・鶴見泰寿両氏に事例報告をいただいた。なお、『木簡研究』第27号を刊行した（編集担当：渡辺晃宏）。

この研究集会の報告スタイルもここ数年で大きく様変わりした。文字に関する限り新しい機器によるプレゼンテーションの威力は甚大だが、実物に即した議論がこの研究集会の身上であることを再度銘記しておきたい。

（渡辺 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2006年3月4日・5日の両日、第22回条里制・古代都市研究会大会が、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。4日は、「古代の資料を用いたGIS研究の最前線」と題して、河角龍典ほか「宮都研究と4D-GIS」、森本晋「平城宮・平城京の調査とGIS」、今津勝紀・隈元崇「天平六年の地震と聖武天皇」の3本の研究報告と討論がおこなわれ、5日は、下三橋遺跡（大和郡山市）、常陸国衙跡（石岡市）、武蔵国幡羅郡衙跡（深谷市）、薩摩国府推定地（薩摩川内市）の各遺跡と、中河内における条里遺構をテーマに、最近の調査成果が報告された。（山本 崇）

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

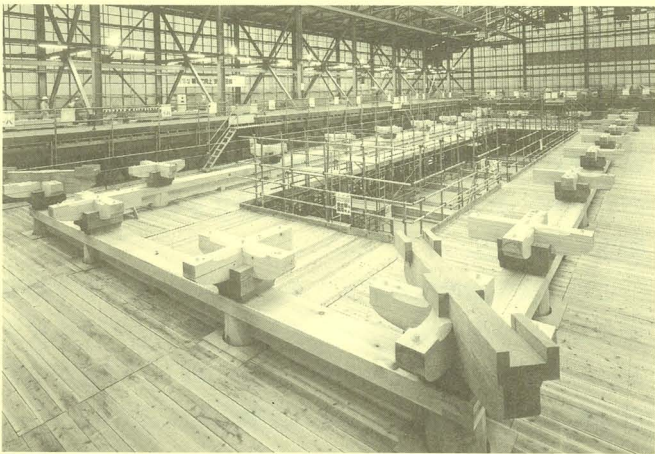
●平城宮跡の整備

特別史跡平城宮跡第一次大極殿復原事業

第一次大極殿復原事業について、昨年度に引き続き、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付平城宮跡整備事務所に対し、施行・監理業務に関する指導・助言をおこなった。また、文化庁から平城宮跡第

一次大極殿院正殿詳細設計を受託した財団法人文化財建造物保存技術協会に対して、詳細設計に必要な資料を提供するとともに、詳細設計に対する指導・助言をおこなった。また、2005の春と秋に文化庁が主催した工事現場の一般公開に協力した。

2006年3月現在で上層柱までの組み立てが完了している。



第一次大極殿正殿（2006年2月撮影）南西から

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する調査検討業務

第一次大極殿地区の古代建築物の構造・意匠や彩色、金具、瓦などに関する調査・研究をおこなうとともに、第一次大極殿地区の整備、管理・活用のあり方の検討などを目的として、文化庁より受託した業務である。

検討内容は、①鴟尾・瓦・磚等に関する復原研究、②飾り金具等の復原研究、③彩色に関する復原研究、④大極殿地区の整備計画の検討、⑤大極殿地区の管理・活用のための調査研究で各項目ともに研究会や検討会等をおこないながら検討を進めた。

①では瓦の色と表面調整の検討、棟・鴟尾の納まりの検討、②では飾り金具の意匠の検討、③では小壁に描く画題の検討、④では整備設計に必要な過去の整備・インフラ等の基礎的データの整理、⑤では管理・運営体制のあり方、宮跡の活用方法、活用のガイドラインの検討を主としておこなった。

●特別史跡高松塚古墳の調査

国宝高松塚古墳壁画の恒久保存対策について

劣化損傷の著しい国宝高松塚古墳壁画を恒久的に保存するための対策に関する文化庁からの委託事業である。平成17年6月に開かれた第4回国宝高松塚古墳壁画恒久

保存対策検討会において提案され、文化庁が決定した「石室を取り出して解体修理」案を受けて、①石室石材取り上げのシミュレーション実験、②石室解体に係る調査研究、③石室解体作業のための調査・検証ならびに石室解体用治具などの試作・検討をおこなった。

①の石室石材取り上げのシミュレーション実験では、壁面に触れずに天井石を横方向から把持して持ち上げる方法と側壁をL型治具で持ち上げる方法のシミュレーションをおこない、これらの方法が有効であることを確認した。

②の石室解体に係る調査研究では、高松塚古墳の石室の解体と石材の梱包・移動等をより安全性の高い方法で実施するための基礎的データを得るため、石室構造の調査、図面ならびに1/5模型の作製をおこない、さらに石室解体実験と実用化を図るための原寸大模型の製作をおこなった。石室構造については現在目視で確認できる範囲において詳細に調査をおこない、各石材の寸法などを把握した上で、石室の構造図ならびに各石材別の図面を作製し、これらの図面を基に1/5石室模型を製作した。石室構造の調査と模型作製により石材の取り上げ方法に関して重要となる基礎データを得ることができた。

③の石室解体作業のための調査・検証ならびに石室解体用治具などの試作・検討では、高松塚古墳の石室石材の解体と移動等に関してより安全性の高い方法を構築するため、石材の劣化と強度に関する調査、第2実験場の造成、第2実験場における解体移動等のシミュレーション、解体用治具、サスペンション型クレーン、石材梱包・固定用特殊フレームの試作・検討に取り組んだ。

高松塚古墳石室石材の強度については、破壊試験をおこなうことは不可能であるため、針貫入試験をおこない、一軸圧縮強度の推定を試みた。その結果、およそ60kgf/cm²程度の強度を有していることがわかった。実際の高松塚古墳において安全に解体作業をおこなうために、高松塚古墳を再現した第2実験場を造成した。上述の強度データを基に、石材を破壊することのないように安全率を3倍に見込んだ把持圧などの算定をおこない、試作した治具を用いて解体移動等のシミュレーションをおこない、安全に吊り上げ・移動をおこなうことができたことを確認した。また、シミュレーション実験により明確になった点について治具の改良を検討した。

●キトラ古墳の調査

キトラ古墳出土遺物の保存処理と科学的調査

平成16年度に実施したキトラ古墳内部の発掘調査に伴い取り上げた漆塗木棺片を主体とする堆積土塊は、最終的にコンテナ108箱分に及んだ。取り上げた堆積土塊は、コンテナ毎にX線透視撮影をおこない、この情報をもとに遺物の慎重な掘り出し作業をおこなった。その結果、刀装具の一部、ガラス玉、琥珀玉などの副葬品と人骨片、さらには漆片、金銅装の飾り金具などの遺物を検出するに至った。

遺物の保存処理を行う過程で最も注目したのは、昨年度報告した帯執金具とは別に新たに数点確認された刀装具である。いずれも主要な部分を高純度の銀によって構成された銀装の大刀飾りの一部とみられる。

また、保存処理を施す中で、6弁の金銅装花飾り板の中心の環が、たいへん純度の高い銀製であることを蛍光X線分析にて確認した。金銅装の中心に銀の環が取り付く豪華なもので、この銀製の環に房が付けられたものと想定できる。このように、遺物に断片的に遺存する金銀を配した姿からでも当初の副葬品の華麗さが偲ばれる。

さらに、石室内の堆積土塊の堆積層断面に対して地質学的な検討を加えた結果、古墳構築から盗掘までの約500年間は、極めて密閉性が高く、安定した石室環境が維持されていたことが判明した。これは、古墳を作る技術の高さを証明する結果にもなった。

以上の成果に対して、2回に分けて記者発表を行い、広く成果公開した。



銀装の刀装具の一部（目釘の頭が見えている）



金銅装飾金具（銀環が取り付く）

発掘調査現地説明会

◆2005年6月18日（土）

中央区朝堂院（平城第389次）

平城宮跡発掘調査部考古第三調査室 中川 あや
参加者人数：516名 調査面積：1,700㎡

◆2005年8月27日（土）

藤原宮朝堂院東第六堂（飛鳥藤原第136次）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室 市 大樹
参加者人数：727名 調査面積：2,062㎡

◆2005年9月17日（土）

名勝旧大乗院（平城第390次）

平城宮跡発掘調査部 高橋 克壽
参加者人数：600名 調査面積：517㎡

◆2005年11月11日（金）

雷丘（飛鳥藤原第139次）見学会

飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室 神野 恵
参加者人数：40名以上 調査面積：505㎡

◆2005年11月16日（水）

甘樫丘東麓遺跡（飛鳥藤原第141次）見学会

飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室 豊島 直博
参加者人数：4,800名 調査面積：725㎡

◆2005年12月17日（土）

東朝集殿（平城第394次）

平城宮跡発掘調査部考古第三調査室 今井 晃樹
参加者人数：300名 調査面積：1,296㎡

◆2006年3月4日（土）

朝集殿院（平城第399次）

平城宮跡発掘調査部考古第二調査室 森川 実
参加者人数：650名 調査面積：1,150㎡

◆2006年3月11日（土）

石神遺跡第18次（飛鳥藤原第140次）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室 金田 明大
参加者人数：3,480名 調査面積：625㎡

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。今年度は、一般研究2課程、専門研修9課程、特別研修3課程の合計14課程の研修を開催した。研修総日数159日、研修生総数191名であった。

また、埋蔵文化財センター及び各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査・遺物の保存・遺跡の保存・遺跡整備等に対しての指導・助言等の協力をおこなっている。2005年度の主なものの一覧を別表に掲げた。

このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査、動物遺存体の同定、年輪年代測定、遺物の保存処理・分析等の受託研究もおこなった。

京都大学大学院の教育

奈良文化財研究所においては、客員として5名が共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野で担当した。文化財調査法論1・2（山中敏史・窪

寺茂）、環境考古学論1・2（光谷拓実・肥塚隆保・松井章）、文化遺産学演習1（山中・窪寺）、文化遺産学演習2（光谷・肥塚・松井）、講座リレー講義の文化・地域環境基礎論を分担した（担当：肥塚）。都城・寺院・地方官衙・集落遺跡論、年輪年代学、保存科学、環境考古学などの講義・演習・実習などをおこなった。

この客員分野に所属して指導を受けた院生は、博士後期課程7名、修士課程7名である。

奈良女子大学大学院の教育

奈良女子大学院との連携教育では、人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員（平成15年度までは併任）として3つの科目を担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなっている。すなわち、小林謙一（客員教授）「日本考古学の諸問題」、花谷浩（客員助教授）「歴史考古学特論」、渡辺晃宏（客員教授）「歴史資料論」である。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡など実地の遺跡や、瓦や土器、木簡を始めとする出土文字資料などの遺物に密着した授業であり、机上の授業では得られない奈文研ならではの特色ある教育となっている。

2005年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧 （委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	(京都) 恭仁宮跡 仁和寺 井手町内遺跡	(広島) 府中市備後国府跡
(岩手) 志波城跡 平泉遺跡群	京丹後市史跡 恵解山古墳 高麗寺跡	(岡山) 鬼城山 津山市景観整備 第二次山陽遺跡
(秋田) 森吉山ダム建設工事	(大阪) 堺市史跡土塔 新堂廃寺 百濟寺跡	備中松山城跡 彦崎貝塚確認調査
(宮城) 多賀城跡 亘理町三十三間堂官衙遺跡	(兵庫) 赤穂城跡 篠山城跡	美作国分寺跡
(福島) 宮畑遺跡	法隆寺領播磨国鶴荘史跡 八上城跡	(山口) 大内氏遺跡 下関市史跡
(栃木) 下野国分寺跡 馬屋久保遺跡	姫路城跡 茶すり山古墳 姫路城石垣整備	(徳島) 脇町市街地景観整備 阿波国分寺庭園
上神主・茂原官衙遺跡	但馬国分寺跡・山名氏城跡 田淵氏庭園	藍住町勝瑞城跡
(茨城) 結城廃寺跡 常陸国衙跡	(奈良) 旧大乗院庭園 藤ノ木古墳	(香川) 宗古瓦窯跡 丸亀城跡 快天山古墳 屋嶋城跡
(新潟) 和島村八幡林官衙遺跡 佐渡金銀山遺跡	キトラ古墳周辺地区 飛鳥歴史公園	(愛媛) 宇和島城跡 久米官衙遺跡群
(福井) 史跡王山古墳群・兜山古墳 福井県朝倉氏遺跡	橿原市伝統的建造物群保存地区 高松塚古墳	(福岡) 大宰府史跡 下高橋官衙遺跡 鴻臚館跡
(岐阜) 長塚古墳 弥勒寺遺跡群 飛騨市宮川種蔵地区	尼寺廃寺跡 唐招提寺金堂	三雲遺跡等
(静岡) 新居関跡 登呂遺跡 興国寺城跡 長浜城跡	大宇陀町伝統的建造物保存地区 市尾墓山古墳	(佐賀) 肥前国府跡 名護屋城跡並びに陣跡
横須賀城跡・高天神城跡 遠江国分寺跡	(和歌山) 根来寺庭園	天狗谷窯跡 大川内鍋島窯跡 東名遺跡群
(三重) 上野城跡 三重県近代和風建築	(鳥取) 妻木晩田遺跡 鳥取県近代和風建築	(長崎) 原の辻遺跡 矢立山古墳群 鷹島海底遺跡
(滋賀) 近江国庁跡 安土城跡 久留倍遺跡	米子市伯耆古代の丘 栃本廃寺跡	旧円融寺庭園
彦根城跡 下之郷遺跡 大津市伝統的建造物群	(鳥根) 石見銀山遺跡 田和山遺跡 松江城	(大分) 安国寺集落遺跡
	山城郷北新造院跡 出雲国府跡	(宮崎) 生目古墳群 日向国分寺跡

2005年度 埋蔵文化財発掘技術者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	申込者数	受講者数
一般研修	埋蔵文化財基礎課程	2005年 8月22日 ～ 8月30日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当の事務系職員若しくはこれに準ずる者	遺跡の発掘調査を進めるために必要な考古学の基礎的知識の研修	遺跡調査技術研究室	9日	20名	20名
	遺物観察調査課程	2005年 8月30日 ～ 9月16日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	各種の遺物調査に必要な基礎的知識と技術の研修	遺跡調査技術研究室	18日	10名	10名
専門研修	保存科学課程	2005年 5月12日 ～ 5月26日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	15日	7名	7名
	文化財写真課程	2005年 6月1日 ～ 6月24日	12名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	写真資料調査室	24日	7名	6名
	地方官衙遺跡調査課程	2005年 7月12日 ～ 7月26日	16名	〃	官衙遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺跡調査技術研究室	15日	12名	12名
	遺跡環境調査課程	2005年 10月13日 ～ 10月28日	16名	〃	遺跡の発掘において、第四紀学の成果を用いて過去の自然環境を推定復原する方法を学ぶ研修	遺物調査技術研究室	16日	7名	7名
	写真基礎課程	2005年 11月24日 ～ 12月7日	16名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な基礎的知識と技術の研修	写真資料調査室	14日	10名	10名
	自然科学的 年代決定法課程	2005年 12月13日 ～ 12月21日	20名	〃	自然科学的手法による年代測定に関する基礎的知識の研修	古環境研究室	9日	8名	8名
	報告書作成課程	2006年 1月11日 ～ 1月20日	24名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	文化財情報研究室	10日	17名	17名
	陶磁器調査課程	2006年 2月1日 ～ 2月9日	20名	〃	中世遺跡出土中国・日本陶磁器の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	国際遺跡研究室	9日	31名	31名
	遺跡保存整備課程	2006年 2月16日 ～ 2月24日	16名	〃	各種遺跡の保存整備・活用に必要な専門的知識と技術に関する研修	保存修復工学研究室	9日	26名	21名
特別研修	出土漆製品の保存科学課程	2005年 9月28日 ～ 9月30日	20名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	出土漆製品の保存科学的研究の一環として歴史的及び技術的な変遷と科学的調査方法に関する研究。さらに復元的研究について紹介する。	保存修復科学研究室	3日	14名	14名
	遺跡地図情報課程	2005年 11月8日 ～ 11月11日	24名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	19名	19名
	動物考古学課程	2006年 3月7日 ～ 3月10日	16名	〃	遺跡出土の動物遺存体研究に関して必要な専門的知識と同定技術の習得をねらう研修	遺物調査技術研究室	4日	9名	9名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「飛鳥の奥津城」

2005年4月16日～5月29日

キトラ古墳や高松塚古墳に見るように、飛鳥の壁画古墳が注目されている。本展覧会では上記2古墳に、石のからと古墳とマルコ山古墳を加えた4古墳の紹介をおこなった。主な展示品はこの4古墳出土品を始め、束明神古墳出土品と、キトラ古墳を昭和58年に調査したときのファイバースコープなどである。

◆夏期企画展「古墳を飾る」

2005年8月2日～8月31日

研究所では昨年度、平城山地区の古墳出土遺物の報告書「平城山1」を刊行した。本企画展ではこの報告書で明らかになった平城山出土の形象埴輪を展示した。特に馬形埴輪においては横に座って乗馬する埴輪が明らかになり、類例を含めて展示した。

◆秋期特別展「東アジアの古代苑地」

2005年10月22日～12月11日

研究所では平成13年度から中国社会科学院考古研究所と唐大明宮太掖池の共同研究調査をおこなってきた。本年度の調査終了を受けて、調査の出土遺物を中心に展示し、古代における苑地の持つ問題を考えてみた。

◆冬期特別展「うずもれた古文書」

2005年2月7日～3月7日

古代の遺跡から出土した漆紙文書を展示した。本展示ではまず漆紙書がどのように生成されるかを、イラストを交えて展示した。さらにこうした漆紙文書の調査に欠かせない赤外線テレビを展示し、漆紙調査の実際をわかりやすく展示した。

用途別床面積(飛鳥資料館)

用途名		面積 (m ²)
展示部門	展示施設	976.0
	収蔵庫等	620.0
管理部門	研究室	125.0
	事務室等	619.0
共通・サービス部門・その他		2,041.3
合計		4,381.3

平城宮跡資料館の展示

◆奈良の都を掘る－発掘調査速報展2005－

2005年10月25日～11月30日

この展示は、平城城宮跡発掘調査部が、主として2004年度に実施した平城宮および平城京内の宅地、寺院の発掘調査の成果を速報展示したものである。

以下、展示内容のあらましを述べる。

平城宮では、まず中央区朝堂院の調査(平城第376次)を紹介した。朱雀門の延長上に、平城宮以前の下ツ道とその側溝を確認し、また先年の調査で明らかになった称徳朝の大嘗宮の建物配置の細部が判明したことを紹介した。つぎに、東区朝集殿院の調査(平城370次)は、唐招提寺に移され講堂として現存している東朝集殿の旧位置でおこなわれた調査で、下層遺構の有無など今回の調査の目的と成果を紹介した。東院地区の調査(平城381次)では、かつて見出された楼閣宮殿に隣接して大規模建物群が確認されたことなど、この地区の遺構の性格に重要な知見がもたらされたことを紹介した。

平城京では、宅地と寺院の調査が主である。左京二条二坊の調査(平城375次)で、大規模な掘立柱建物の柱穴底に木製礎板において軟弱な地盤を補強している工夫をみていただいた。継続して調査を実施している旧大乘院庭園の調査(平城374次)では池や橋に技巧をこらした造園の各種の手法がつつぎと判明している様子を展示し、「南都随一の名園」と称えられた大乘院の旧規をしのんでいただいた。

出土遺物では、瓦、土器が中心となった。平城宮東院地区では、調査地域の性格に関連する墨書土器など過去の調査の出土品もあわせて展示した。展示遺物の年代は古代にかぎらず中・近世までひろげ、平城京のその後の歩みをもみていただけるように配慮した。中世では、大和の土器座として記録に見える「赤土器」「白土器」の現物を展示した。

このほかでは、2001年に一乗院の調査で出土した朝鮮王朝時代の「葡萄文硯」を今回はじめて展示した。出土品としては5例目になる希少な文房具で、門跡寺院としての寺格をほこった一乗院ならではの遺品であり、観覧者の目をひいた。

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる来訪者等に平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2006年4月1日現在144名（1期生50名、2期生22名、3期生42名、4期生30名）の解説ボランティアが登録、1日当たり7～10名が休館日を除く毎日、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門、大極殿工事現場の公開施設を拠点に活動している。

2005年度は、延べ7万9千有余名を解説、各人概ね月2～3日の活動状況である。この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県のHP、観光情報誌等にも何度も採り上げられ、来訪者からお礼の手紙が寄せられている。また、平城宮跡での熟達した高度な文化解説は、好評を得ており、ボランティアの熱心な学習意欲と熱意により、「ボランティアだより」などを作成している。

研究所としては、解説ボランティア活動を積極的に支援するため活動着の配布、研究所員を交えた意見交換会を実施、さらに研修会、学習会及び、遺跡見学会を実施、解説資料や刊行物の提供をしている。

2005年度 平城宮跡解説ボランティア活動状況

ボランティア 活動者数	解 説 の べ 人 数			
	団 体		個 人	計
	学 生	一 般		
2,948	27,639	16,078	35,665	79,382

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、歴史・考古学分野を中心とした文化財資料のナショナルセンターとなるべく、図書資料・写真資料を収集している。所外の研究者および一般の利用者へは、一般公開施設として図書資料室を公開し、閲覧等の利用が可能となっている。蔵書検索に関

しても一般的な図書館と同様インターネット経由で検索可能である。

本研究所では、文化財情報の電子化をおこなうとともに公開用の文化財関係データベースの作成を継続的に実施しており、そのほとんどをインターネット経由で公開している。

公開データベース一覧

木簡データベース
 木簡画像データベース【木簡字典】
 全国木簡出土遺跡・報告書データベース
 墨書土器データベース(調整中)
 軒瓦データベース
 遺跡データベース
 地方官衙関係遺跡データベース
 官衙関係遺跡整備データベース
 斜面保護データベース
 発掘庭園データベース
 Archaeologically Excavated Japanese Gardens
 所蔵図書データベース
 報告書抄録データベース
 薬師寺典籍文書データベース

図書・写真資料 (2006年3月31日現在)

図書：253,488冊

単位:冊

区分	種別	購入	寄贈	計
2005年度	和漢書	1,712	12,950	14,662
	洋書	7	288	295
累計	和漢書	74,748	168,286	243,034
	洋書	6,524	3,930	10,454

写真：850,045点

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

- 第1冊 仏師運慶の研究(1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究(1954)
 第3冊 文化史論叢(1955)
 第4冊 奈良時代僧房の研究(1956)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告(1957)
 第6冊 中世庭園文化史(1958)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告(1958)
 第8冊 文化財論叢Ⅰ(1959)
 第9冊 川原寺発掘調査報告(1959)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
 第11冊 院の御所と御堂－院家建築の研究－(1961)
 第12冊 巧匠阿弥陀仏快慶(1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究(1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ
官衙地域の調査(1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ
内裏地域の調査(1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ
官衙地域の調査(1965)
 第18冊 小堀遠州の作事(1965)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家(1967)
 第20冊 名物烈の成立(1969)
 第21冊 研究論集Ⅰ(1971)
 第22冊 研究論集Ⅱ(1973)
 第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ
平城京左京一条三坊の調査(1974)
 第24冊 高山－町並調査報告－(1974)
 第25冊 平城京左京三条二坊(1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ
内裏北外郭の調査(1975)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ(1975)
 第28冊 研究論集Ⅲ(1975)
 第29冊 木曾奈良井－町並調査報告－(1975)
 第30冊 五條－町並調査の記録－(1976)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ(1977)
 第32冊 研究論集Ⅳ(1977)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告(1977)
 第34冊 平城宮発掘調査報告Ⅸ
宮城門・大垣の調査(1977)
 第35冊 研究論集Ⅴ(1978)
 第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ(1978)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ(1979)
 第38冊 研究論集Ⅵ(1979)
 第39冊 平城宮発掘調査報告Ⅹ
古墳時代Ⅰ(1980)
 第40冊 平城宮発掘調査報告Ⅺ
第一次大極殿地域の調査(1981)
 第41冊 研究論集Ⅶ(1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告Ⅻ
馬寮地域の調査(1984)
 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告(1986)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
 第47冊 研究論集Ⅷ(1988)
 第48冊 年輪に歴史を読む
－日本における古年輪学の成立－(1990)
 第49冊 研究論集Ⅸ(1990)
 第50冊 平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅢ
内裏の調査Ⅱ(1990)
 第51冊 平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅣ
平城宮第二次大極殿院の調査(1992)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書(1992)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊－長屋王邸・藤原麻呂邸－発掘調査報告(1994)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ
－飛鳥水落遺跡の調査－(1994)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡(1998)
 第58冊 研究論集Ⅹ(1999)

- 第59冊 中世瓦の研究(1999)
- 第60冊 研究論集 XI (1999)
- 第61冊 研究論集 XII (2000)
- 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告(2000)
- 第63冊 山田寺発掘調査報告(2001)
- 第64冊 研究論集 XIII (2001)
- 第65冊 文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集(2002)
- 第66冊 研究論集 XIV (2002)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編[法華寺南遺跡](2002)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百濟大寺跡の調査(2002)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告 XV
東院庭園地区の調査(2002)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告 XVI
兵部省地区の調査(2004)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告(2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告 I
石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査(2004)
- 第73冊 タニ窯跡 A 6号窯跡発掘調査報告書(2004)
- 第74冊 古代庭園研究 I (2005)
- 奈良文化財研究所史料**
- 第 1 冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)(1954)
- 第 2 冊 西大寺叡尊伝記集成(1955)
- 第 3 冊 仁和寺史料 寺誌編 1 (1963)
- 第 4 冊 俊乗坊重源史料集成(1964)
- 第 5 冊 平城宮木簡 1 図版
(平城宮発掘調査報告 V)(1966)
別冊 平城宮木簡 1 解説
(平城宮発掘調査報告 V)(1969)
- 第 6 冊 仁和寺史料 寺誌編 2 (1967)
- 第 7 冊 唐招提寺史料 I (1970)
- 第 8 冊 平城宮木簡 2 図版
(平城宮発掘調査報告 VIII)(1974)
別冊 平城宮木簡 2 解説
(平城宮発掘調査報告 VIII)(1975)
- 第 9 冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1974)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1975)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1976)
- 第12冊 藤原宮木簡 1 図版・解説(1977)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1977)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1978)
- 第15冊 東大寺文書目録第 1 巻(1978)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡 3 図版・解説(1979)
- 第18冊 藤原宮木簡 2 図版・解説(1979)
- 第19冊 東大寺文書目録第 2 巻(1979)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第 3 巻(1980)
- 第22冊 七大寺巡礼私記(1981)
- 第23冊 東大寺文書目録第 4 巻(1981)
- 第24冊 東大寺文書目録第 5 巻(1982)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1982)
- 第26冊 東大寺文書目録第 6 巻(1983)
- 第27冊 木器集成図録 - 近畿古代編 - (1984)
- 第28冊 平城宮木簡 4 図版・解説(1985)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第 1 巻(1985)
- 第30冊 山内清男考古資料 I (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料 2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料 3 (1991)
- 第34冊 山内清男考古資料 4 (1991)
- 第35冊 山内清男考古資料 5 (1991)
- 第36冊 木器集成図録 - 近畿原始編 - (1992)
- 第37冊 梵鐘実測図集成(上)(1992)
- 第38冊 梵鐘実測図集成(下)(1993)
- 第39冊 山内清男考古資料 6 (1993)
- 第40冊 山田寺出土建築部材集成(1994)
- 第41冊 平城京木簡 1 (1994)
- 第42冊 平城宮木簡 5 (1995)
- 第43冊 山内清男考古資料 7 (1995)
- 第44冊 興福寺典籍文書目録第 2 巻(1995)
- 第45冊 北浦定政関係資料(1996)
- 第46冊 山内清男考古資料 8 (1996)
- 第47冊 北魏洛陽永寧寺(1997)
- 第48冊 発掘庭園資料(1997)
- 第49冊 山内清男考古資料 9 (1997)
- 第50冊 山内清男考古資料 10 (1998)
- 第51冊 山内清男考古資料 11 (1999)
- 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法(1999)

- 第53冊 平城京木簡2 長屋王家木簡2 (2000)
- 第54冊 山内清男考古資料12 (2000)
- 第55冊 法隆寺古絵図集 (2001)
- 第56冊 法隆寺考古資料 (2001)
- 第57冊 日中古代都城図録 (2002)
- 第58冊 山内清男考古資料13 (2002)
- 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ (2002)
- 第60冊 平城京条坊総合地図 (2002)
- 第61冊 鞆義黄冶唐三彩 (2002)
- 第62冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉 (2002)
- 第63冊 平城宮木簡6 (2003)
- 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ (2003)
- 第65冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉Ⅱ (2003)
- 第66冊 山内清男考古資料14 (2003)
- 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻 (2003)
- 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編 (2003)
- 第69冊 平城京漆紙文書(一) (2004)
- 第70冊 山内清男考古資料15 (2004)
- 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ
朝鮮・日本編 (2004)
- 第72冊 畿内産土師器集成西日本編 (2004)
- 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見 (2005)
- 第74冊 山内清男考古資料16 (2005)
- 第75冊 平城京木簡3 二条大路木簡1 (2005)
- 第76冊 評制下荷札木簡集成 (2005)
- 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ (2005)
- 第3冊 日本古代の墓誌 (1977)
- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇 (1978)
- 第5冊 古代の誕生仏 (1978)
- 第6冊 飛鳥時代の古墳
- 高松塚とその周辺 - (1979)
- 第7冊 日本古代の鴟尾 (1980)
- 第8冊 山田寺展 (1981)
- 第9冊 高松塚拾年 (1982)
- 第10冊 渡来人の寺 - 桧隈寺と坂田寺 - (1983)
- 第11冊 飛鳥の水時計 (1983)
- 第12冊 小建築の世界 - 埴輪から瓦塔まで - (1983)
- 第13冊 藤原 - 半世紀にわたる調査と研究 - (1984)
- 第14冊 日本と韓国の塑像 (1985)
- 第15冊 飛鳥寺 (1985)
- 第16冊 飛鳥の石造物 (1986)
- 第17冊 萬葉乃衣食住 (1987)
- 第18冊 壬申の乱 (1987)
- 第19冊 古墳を科学する (1988)
- 第20冊 聖徳太子の世界 (1988)
- 第21冊 仏舍利埋納 (1989)
- 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 (1989)
- 第23冊 日本書紀を掘る (1990)
- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察 (1991)
- 第25冊 飛鳥の源流 (1991)
- 第26冊 飛鳥の工房 (1992)
- 第27冊 古代の形 (1994)
- 第28冊 蘇我三代 (1995)
- 第29冊 斉明紀 (1996)
- 第30冊 遺跡を測る (1997)
- 第31冊 それからの飛鳥 (1998)
- 第32冊 UTAMAKURA (1998)
- 第33冊 幻のおおでら - 百済大寺 (1998)
- 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として (1999)
- 第35冊 あすかの石造物 (1999)
- 第36冊 飛鳥池遺跡 (2000)
- 第37冊 遺跡を探る (2001)
- 第38冊 'あすか - 以前' (2002)
- 第39冊 A 0 の記憶 (2002)
- 第40冊 古年輪 (2003)
- 第41冊 飛鳥の湯屋 (2003)
- 第42冊 古代の梵鐘 (2004)
- 奈良文化財研究所基準資料**
- 第1冊 瓦編1 解説 (1973)
- 第2冊 瓦編2 解説 (1974)
- 第3冊 瓦編3 解説 (1975)
- 第4冊 瓦編4 解説 (1976)
- 第5冊 瓦編5 解説 (1976)
- 第6冊 瓦編6 解説 (1978)
- 第7冊 瓦編7 解説 (1979)
- 第8冊 瓦編8 解説 (1980)
- 第9冊 瓦編9 解説 (1983)
- 飛鳥資料館図録**
- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
- 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇 (1976)

- 第43冊 飛鳥の奥津城
ーキトラ・カラト・マルコ・高松塚 (2004)
- 第44冊 東アジアの古代苑池(2005)
- 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち(2005)

飛鳥資料館カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
- 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1ー最近の出土品(1975)
- 第3冊 飛鳥の仏像(1978)
- 第4冊 桜井の仏像(1979)
- 第5冊 高取の仏像(1980)
- 第6冊 檀原の仏像(1981)
- 第7冊 飛鳥の王陵(1982)
- 第8冊 大官大寺ー飛鳥最大の寺ー(1985)
- 第9冊 高松塚の新研究(1992)
- 第10冊 飛鳥の一とー最近の調査からー(1994)
- 第11冊 山田寺(1997)
- 第12冊 山田寺東回廊再現(1997)
- 第13冊 飛鳥のイメージ(2001)
- 第14冊 古墳を飾る(2005)
- 第15冊 うずもれた古文書(2005)

- 重要文化財小野家住宅管理活用計画調査報告書
- 野崎家旧宅調査報告書
- 竹村家住宅調査報告書
- 木造建造物の保存修復のあり方と手法(提言)
- 歴史学編年研究における年輪年代法の応用研究成果報告書
- 東北アジア考古学論叢
- 古代ローマのヴィラ・ガーデン報告書
- キトラ古墳
- 奈良の都を掘るー発掘速報展平城2005ー
- 研究図録貫前神社蔵鏡図録
- 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報19
- 重要文化財建造物現状変更説明1974～1976(本文編)
- 重要文化財建造物現状変更説明1974～1976(図版編)
- 国宝・重要文化財建造物写真乾板目録Ⅲ

その他の刊行物(2005年度)

- 奈良文化財研究所紀要2005
- 奈文研ニュースNo.17
- 奈文研ニュースNo.18
- 奈文研ニュースNo.19
- 奈文研ニュースNo.20
- 埋蔵文化財ニュース122(環境考古学6・7)
- 埋蔵文化財ニュース123
- (Dendrochronology of the American Southwest)
- 埋蔵文化財ニュース124
- (古代のガラスー考古科学的調査・研究からー)
- 埋蔵文化財ニュース125
- (2004年度埋蔵文化財関係統計資料)
- 高所寺池ー藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査ー
- 高松塚古墳の調査報告書
- 唐招提寺の歴史と景観に関する研究報告書
- 南都諸大寺所蔵歴史資料の調査状況報告
- 地方官衙と寺院
- 上問屋手塚家住宅調査報告書

人事異動 (2005.4.1~2006.3.31)

●2005年4月1日付け

研究所長	田辺 征夫
管理部業務課長	佐藤 敏明
管理部業務課課長補佐	今西 康益
管理部文化財情報課課長補佐	永田 裕美
管理部管理課会計係長	及川 厚
管理部管理課用度係長	江川 正
管理部業務課研修・事業係主任	中粉 義政
管理部管理課庶務係	高田 幸恵
管理部管理課用度係	岡田 祐一
埋蔵文化財センター長	毛利光俊彦
協力調整官	岡村 道雄
平城宮跡発掘調査部長	川越 俊一
飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	安田龍太郎
平城宮跡発掘調査部考古第一調査室長	小池 伸彦
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長	西口 壽生
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室長	井上 和人
埋蔵文化財センター保存修復工学研究室長	小澤 毅
文化遺産研究部主任研究官	吉川 聡
平城宮跡発掘調査部考古第一調査室	和田一之輔
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室	小田 裕樹
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室	神野 恵
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室	豊島 直博
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室	山本 紀子
日本芸術文化振興会新国立劇場部管理課長	山内 浩一
大阪大学医学部附属病院医事課主任専門職員	鹿田 三郎
京都大学総務部広報課課長補佐	大山 達夫
大阪大学歯学研究科総務課人事係長	林 政伸
京都大学施設・環境部施設企画課工事契約掛長	東部 浩志
大阪大学人間科学研究科会計係長	牧野 弘之
奈良教育大学施設課設備係長	松井 敏夫

●2005年7月1日付け

飛鳥資料館学芸室	清永 洋平
文化庁文化財部参事官付(建造物担当)調査官	西山 和宏

●2005年8月1日付け

平城宮跡発掘調査部遺構調査室	黒坂 貴裕
----------------	-------

●2006年3月15日付け

総務部総務課長	鈴木 修二
京都国立博物館渉外課長	大西 真一

●2006年3月30日付け

辞職	花谷 浩
----	------

●2006年3月31日付け

定年退職	毛利光俊彦
定年退職	綾村 宏

●2006年3月22日

管理部管理課課長補佐 (公務外死亡)	長谷川 功
-----------------------	-------

予算等

予算(予定額)

単位:千円

	2005年度	2006年度(予定額)
文部科学省からの運営費交付金(人件費を除く)	1,101,357	1,004,301
施設整備費(還付消費税)	548,969	0
自己収入(入場料等)予定額	14,389	28,755
計	1,671,470	1,033,056

土地と建物

単位:m²

	土地	建物(建面積/延面積)	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年ほか
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年ほか
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)	20,515.03	5,533.23/8,006.96	1988年ほか
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,353.84/4,381.30	1974年ほか

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金(2006年4月17日現在)

単位:千円

研究種目	2005年度		(参考)2006年度	
	件数	金額	件数	金額
特定領域研究	3	19,200	1	5,900
基盤研究(S)	1	20,670	1	17,290
基盤研究(A)	4	34,450	4	36,530
基盤研究(B)	4	11,500	7	29,800
基盤研究(C)	8	5,800	7	5,200
若手研究(A)	1	1,560	—	—
若手研究(B)	9	7,500	11	8,900
特別研究員奨励費	1	1,200	1	1,200

受託調査研究

単位:千円

区分	2004年度		2005年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	21	68,602	19	63,440
発掘	17	99,469	10	57,071
計	38	168,071	29	120,511

職員一覧 (独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所)

